

県営中山間総合整備事業筑北地区

埋蔵文化財発掘調査報告書

さかきたむら
坂北村

ひがしばた いせき
東畑遺跡



—— 谷あいには生きて縄文人の暮らし

2005.3

長野県松本地方事務所
坂北村教育委員会

「坂北村 東畑遺跡」 正誤表

訂正箇所	誤	正
P45:分析レポート1の説明文中の表右下部分	実年代の確定(西暦表記)とその確立	実年代の確定(西暦表記)とその確率

県営中山間総合整備事業筑北地区

埋蔵文化財発掘調査報告書

さかきたむら
坂北村

ひがしばた いせき
東畑遺跡



—— 谷あいには生きてきた縄文人の暮らし

2005. 3

長野県松本地方事務所
坂北村教育委員会

ごあいさつ

東畑遺跡は坂北村役場から西へ約3 km、仁熊地区の麻績川が蛇行して巡る段丘上にあります。ここは筑北地方では古くから知られた遺跡であり、土器や石器を拾った経験のある村人も大勢居ります。

この度、農地整備工事により遺跡の破壊が避けられない状況であったため、本格的に発掘調査を行うこととなりました。坂北村教育委員会は事業主体の長野県からの委託を受け、長野県埋蔵文化財センターの指導のもと、調査を担当して進めてまいりました。

平成15年5月に着手した発掘調査では、その進行とともにこの遺跡が予想をはるかに超える大規模集落であることが判明し、翌春には水稲を作付けするという時間的制約の中、急遽一部を盛土保存に変更する等いくつかの調整を図りました。その結果、平成15年10月末日と決められた期間内に厳しくも濃密なる現地調査を終了いたしました。

発掘調査から得た遺物や記録類もまた予想を上回る数量でした。平成16年度はこの資料の整理や土器復元、分析といった地道な業務をひとつひとつ積み重ね、記録保存することに努めてまいりました。

この報告書は、地元の教育委員会が調査を担当してきた経過を考慮し、村民の皆様が手にとって親しみやすく、内容・解説も理解し易い表現といたしました。なお、詳細で専門的記録やデータ類はCD（2枚）に収め、本冊とセットの体裁といたしました。

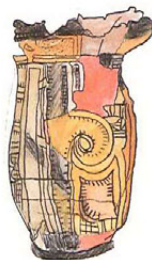
筑北に栄えた縄文のロマン、東畑遺跡の調査から得た貴重な成果を盛ったこの報告書の刊行を喜びるとともに、多くの皆様に活用されますことを期待するものであります。

最後となりましたが、調査実施と報告書作成にあたり、ご協力ご指導をいただきました地権者の皆様、酷暑の夏を耐えて従事されました発掘補助員の皆様、繊細緻密な業務に携わられました整理補助員の皆様、そして長野県、長野県埋蔵文化財センターを始め連携して業務を進めていただきました皆様に心よりお礼申し上げます。

平成17年3月

坂北村教育委員会

教育長 柳澤 毅



目次

ごあいさつ 3

第1章 遺跡の位置

地理的位置 7
遺跡をとりまく環境 8
周辺の遺跡 12

第2章 集落のくらし

遺跡の微地形と基本土層 14
縄文時代の足跡を探す 15
みつかった足跡とその性格 16
「縄文土器」という道具 36
分析レポート1 45
土器付着物や炭化材から年代を測る
分析レポート2 46
土器の粘土から産地を探る
石でつくった道具 48
分析レポート3 50
石器からみたムラの生活
人々が食べていたものは何か 51
分析レポート4 52
石器はどう使われた？
心といのり、そのかたち 54
東畑ムラの秋の風景 58

第3章 周辺地域との交流

土器や石器が来た道 60
分析レポート5 62
きれいな石はどこから来たのか
釣り針の形をした石器 63
縄文時代の信濃と越後の交流 64

第4章 集落の移り変わり

縄文という時代 66
東畑ムラ、1,500年の歴史 67
住居の移り変わり 68

第5章 調査の記録

発掘調査が行われた理由 82
遺跡を保護する 84

第6章 これからの東畑遺跡

遺跡に訪れた皆さん 90
子供たちと縄文時代 91
東畑遺跡速報展 92
文化祭 93
資料の保管と遺跡の現状 94
坂北村と東畑ムラ、これから 95
成果と課題 96
あとがき 97
引用・参考文献 98
図版目録 100
用語かいせつ 103
実測図版 105
坂北村の歴史 117
筑北地区の遺跡/指定文化財 118
筑北地区の遺跡・文化財マップ
東畑遺跡全体図
調査体制/執筆分担
協力者・協力機関一覧
報告書抄録

例言

- 1 本書は、けんえいちゅうさんかんそうごうせいびじぎょう 県営中山間総合整備事業筑北地区、はじょう 圃場整備事業にかかる、東畑（ひがしばた）遺跡発掘調査報告書です。
- 2 東畑遺跡は、ながのけんひがしちくまくんさかきたむらにゆうま 長野県東筑摩郡坂北村仁熊8031番地ほかに位置します。
(遺跡番号 県4660・村12)
- 3 試掘調査、本調査および報告書作成業務は長野県松本地方事務所の委託を受けて、坂北村教育委員会が実施しました。
- 4 平成15年・16年度ともに調査と報告書刊行について、財団法人長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センターに技術指導を委託しました。
- 5 試掘調査は県教育委員会の指導のもと、平成14年2月20日～22日まで実施しました。
- 6 本調査は平成15年5月15日から10月31日まで実施し、その後、16年3月25日まで基礎整理業務を実施しました。
- 7 平成16年度は報告書作成業務を、4月22日から17年3月25日まで実施しました。
- 8 平成15年・16年度ともに費用の一部に国庫補助金の交付を受けています。
- 9 本報告書は本文編とデータCD2枚（1：データ編、2：画像・動画編）で構成されています。
- 10 本書およびCDの編集・校正は、村教委勝田智紀と県埋文センター柳澤亮が担当しました。
- 11 業務の分担、本書の執筆者は巻末に記しました。
- 12 本事業の実施にあたりまして、多くの機関、個人の方々よりご協力を受けました。巻末に記して感謝の意を表します。

第1章

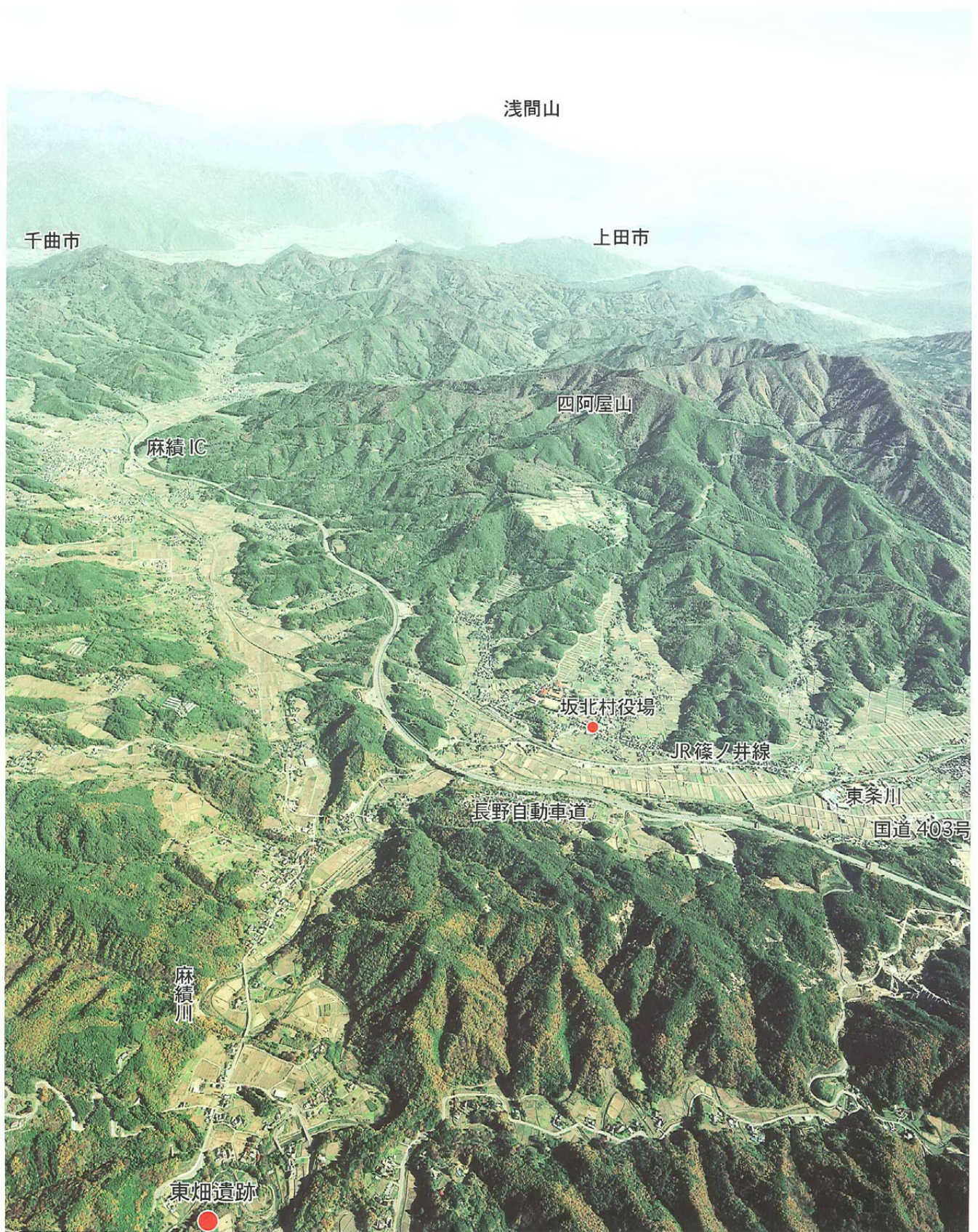
遺跡の位置



坂北村は長野県の中信地方、東筑摩郡ひがしちくまの北端の通称「筑北（ちくほく）」とよばれている地域に位置します。坂北村のほか、麻績村おみ、坂井村さかい、本城村ほんじょうの筑北4ヶ村は大小の山々に囲まれた山村です。その村々を流れる河川は坂北村で合流し、麻績川となって犀川さいがわへ流れ込んでいきます。その犀川も長野市で千曲川となり、さらに北上して信濃川と名前を変えて日本海をめざします。

東畑遺跡は蛇行する麻績川によってつくられた段丘上に営まれた縄文時代の集落（ムラ）の跡です。





1 遺跡上空から浅間山を望む

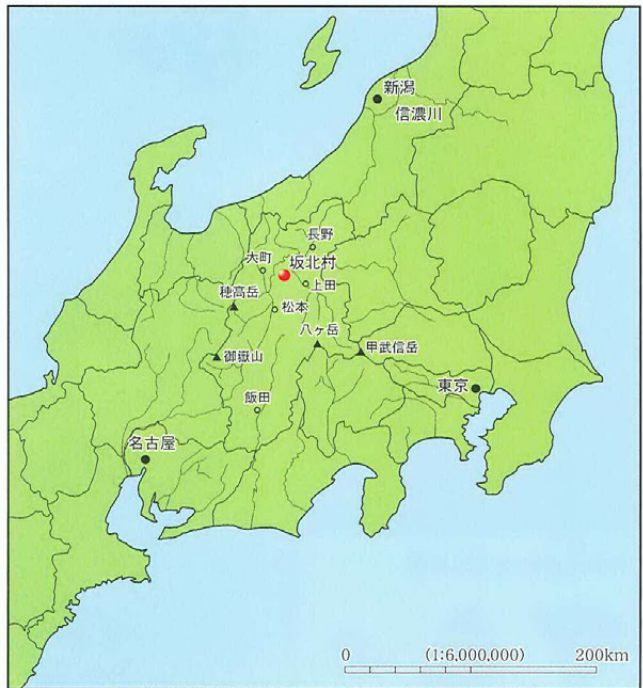
(2000年秋)

日本海に注ぐ信濃川の支流



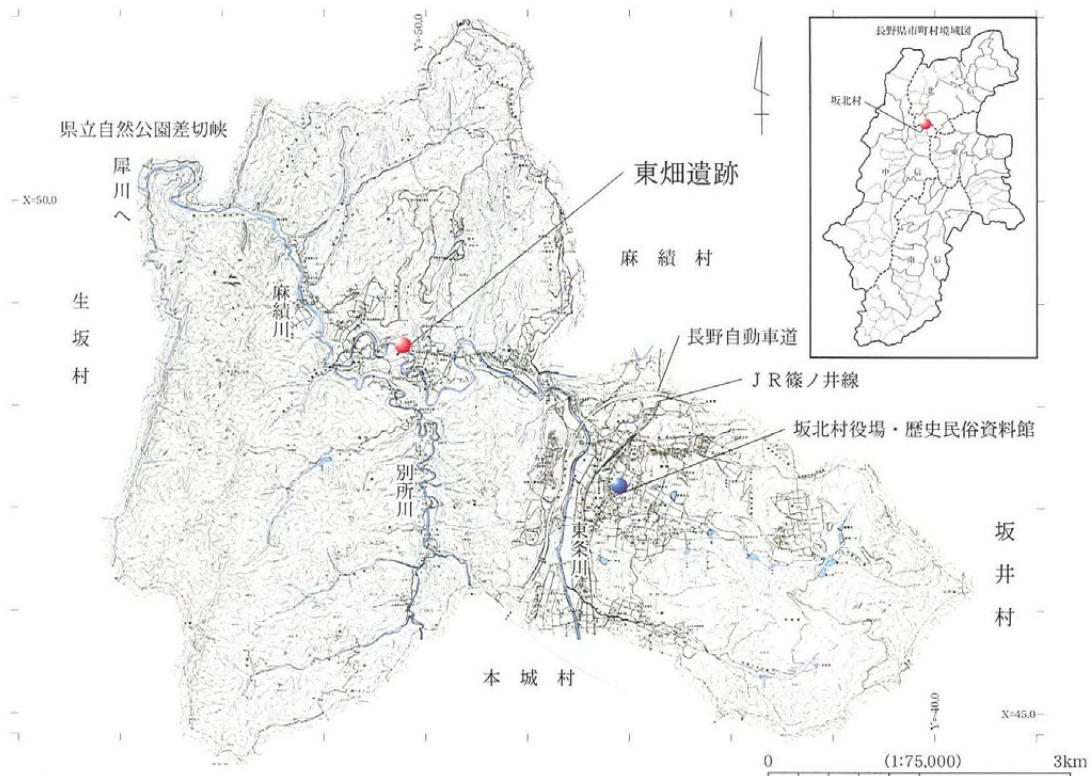
2 日本列島の中の東畑遺跡

坂北村は本州のほぼ中央の内陸地域に位置する。降水量が少なく、年平均1,000mm前後。降水型は太平洋型を示すが、日本海に70kmと近いため冬季の積雪は北の影響を受ける。



3 信濃川の支流、麻績川

麻績川は日本最長の川、信濃川の支流である。松本平から流れ来る犀川へ合流し、善光寺平では千曲川へ、そして北上して、新潟県で信濃川と名前を変えて日本海をめざす。



4 坂北村全図

麻績川は、冠着山や大林山に源を発し、本城村から流れる東条川をはじめとする幾筋もの支流の水を集め、蛇行しながら筑北の谷を西に流れる。やがて坂北村仁熊、赤松地区より差切峡谷に入ると、それまでの静かな流れから一変して、各所に滝や淵をつくって岩の間を流れ下り、山清路（犀川）へ向かう。

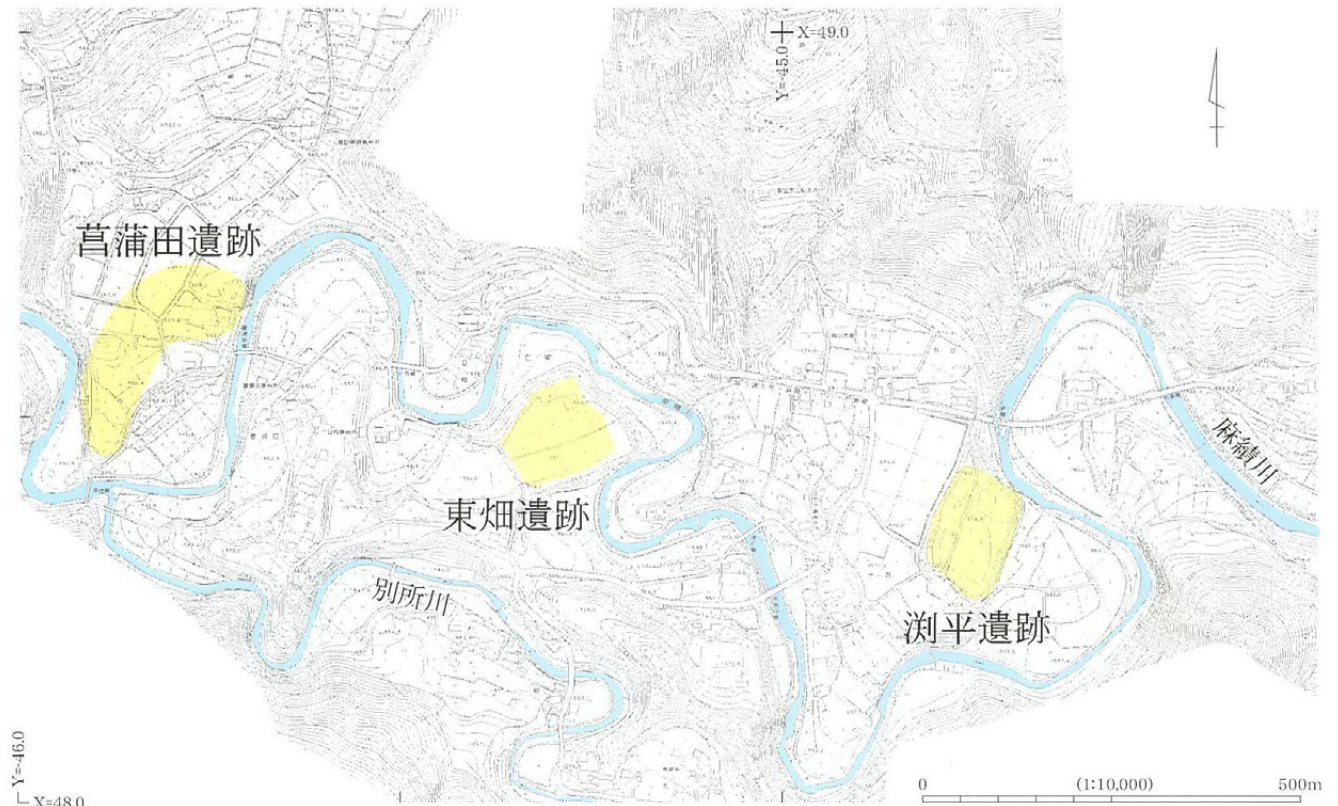
遺跡をとりまく環境

蛇行する麻績川と遺跡の立地



5 遺跡周辺の地形と麻績川

現在、麻績川周辺の低地ばかりでなく、東畑遺跡の立地する台地上も動力ポンプで揚水して水田として利用されている。昭和20～30年頃は桑畑が広がっていた。



6 遺跡周辺の地形と麻績川

東畑遺跡から見たせる、ちょうど同じような台地上から、縄文時代の遺物が採集されている。東畑の東500mにある湊平遺跡からは磨製石斧が出土している。また西500mにある菖蒲田遺跡からは、東畑と同時期の縄文時代中期の土器片が採集されている。隣りあったムラだったのかもしれない。台地は水場に近く水はけが良いため暮らしやすかったのだろう。

明治の測量図にみる遺跡

右と思えば左、北と思えば南へと、麻績川の流れは坂北村竹場の中島橋を越えるあたりから、一段と蛇行が激しくなります。

長野自動車道麻績インターチェンジから南西へ4km。ひとつの川であるのに、遺跡までの道中で3つの橋を渡ることでもその蛇行ぶりがよくわかります。

普段は穏やかな水面をみせる麻績川ですが、大小の支流と蛇行する流れのため、ひとたび豪雨となれば大きな被害をもたらします。

昭和34年台風7号の豪雨では、筑北地域一帯に大きな水害をもたらしました。東畑遺跡付近でも低い水田が本流となり、台地の斜面を大きく切り崩しながら、土石流となって差切峡へ向かいました。

役場に保管されていた、今から約120年前、明治18年～21年に行われた現地目調査による測量図（切図）をみると、麻績川は遺跡の手前で東西に大きく蛇行していることがわかります。

東畑に人々が暮らした縄文時代から四千年。この長い歳月の間に麻績川は台地を削り谷を埋め、幾たびもその流路を変えながら流れていたことでは

う。縄文時代の東畑の台地は今よりもっと広く、川に面した急な崖は緩やかな傾斜をしていて、川も今より高い位置を流れていたのでしょう。



7 遺跡手前で大きく蛇行する麻績川（南側から撮影）
遺跡手前の土がある部分は現在土捨て場として利用されている。明治の頃にはそこまで川が流れていた。



8 明治20年頃に測量された切図（合成図）

明治18年～21年にかけて行われた現地目調査のためにつくられた測量図。原本の縮尺は600分の1。村役場では地域ごとにつづられて保管されている。今回は7枚分の切図を合成した。遺跡のある台地は麻績川によって大きくえぐられて、こぶのように飛び出ている。

地形と地質

坂北村は今から2,500万年～200万年前、まだ海の底でした。そこで堆積した砂や泥は礫岩^{れきがん}や砂岩^{さがん}、泥岩^{でいがん}などの硬い堆積岩となり、その後隆起して陸地となりました。

麻績川沿いの道を行くと、河岸段丘の崖面に幾筋にも重なる地層が観察できます。東畑遺跡の下に見える地層も「細田砂岩泥岩互層」とよばれる、この堆積層のひとつです。また「青柳の切り通し^{*}」として有名な、天正8年(1580年)青柳氏によって開かれた硬い岩も、海底に堆積していた礫岩砂岩層です。

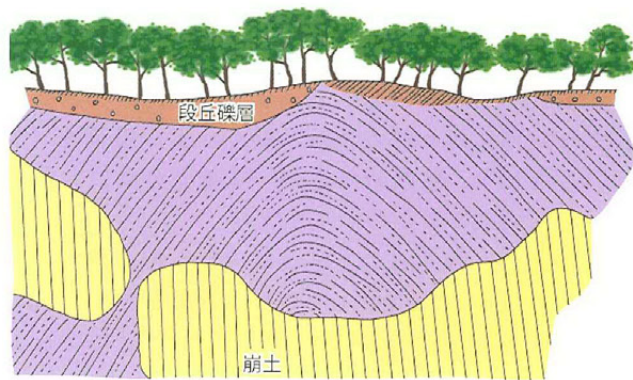
陸地となった後、長い間の浸食作用や火山活動、地殻変動によって次第に谷地形や山々が造られていきました。東畑遺跡の台地も古くは川によって削られています。遺跡の調査でもその時に堆積した砂や砂利、丸くなったチャート^{*}などが入る礫層がみつかりました。

その後、麻績川は蛇行を繰り返す、周囲の地形を削り取りながら、東畑のような河岸段丘を形成していきます。麻績川がこのような大きく蛇行する理由は、差切峡に硬い礫岩層が川筋に直交して横たわり、スムーズな水の流れを邪魔しているためと考えられています。



9 遺跡下の地質 (左：上部、右：下部)

上部に段丘堆積物の礫層が顔をみせている。その下は砂岩や泥岩が重なりあっている。はるか数千万年前、ここが海であった頃の堆積物である。



10 近くの別所川右岸に見える褶曲^{*}の様子

筑北地域には第三紀層^{だいさんきそう}が広く分布して、堆積岩類にはいちじるしい褶曲や大規模な断層が発達している。(坂北村誌より)



11 遺跡下を流れる麻績川

川底にも第三紀層の堆積岩がみえる。縄文の人々はこの平らな石を炉石や敷石に利用していた。

現在の土地利用と植生

坂北村の森林面積は、2,364ヘクタールで、村総面積の約80%を占め、約20%は、耕作地・住居地・道路などです。このうち人工林*は783ヘクタールで、約33%、アカマツ・カラマツが主で、わずかにスギ・ヒノキがあります。天然林*(自然林)は、クリ・コナラ・クスギなどの雑木林で約57%となっています。

坂北村の最高標高は四阿屋山^{あずまやさん}で1,387m、最低標高は麻績川下流の中込で480m、全村が低山帯(約500~1,500m)にはいり、夏緑樹林(温帯落葉広葉樹)が大部分を占めています。標高約1,000m付近を境にして上部はブナ帯、下部はクリ帯に属しそれぞれ特徴ある植生がみられます。現在の植生は、自然植生*と代償植生*に分けられます。

森林を中心にみると、自然植生では、原生林*のような本来の自然植生はみられませんが、自然植生に近い森林は、ブナ林・サワグルミ林・イヌブナ林・アカマツ林・ケヤキ林・コナラ林などがあげられます。代償植生では、ミズナラ林・アカマツ林・カラマツ林・マダケ林・スギ林があります。(詳しくは村誌さかきたを参照)

ミズナラ林以外は植林された植生ですが、近年は管理の行き届かない状態が増加していて、林内の高木層・亜高木層には、クスギ・コナラ・クリ・ツノハシバミ・リョウブ・ネジキ・ダンコウバイなどが生育し、林床には幼木もみられます。耕作放棄地や荒地などでは、帰化植物(草本)→ススキ草原→アカマツ林→雑木林*の遷移^{せんい}が予想されます。現在の耕作地・住居地・道路は縄文時代にはなく、林地・草地・湿地な

どであったと考えられます。

縄文時代の植生が現在の自然植生に近い状態であったと推察すると、クリ・クスギ・コナラ・カシワのドングリは身近にあり、少し足を延ばせば、今よりも広範囲に分布していたであろう四阿屋山^{あずまや}や聖山^{ひじりやま}山麓のミズナラ・ブナ・イヌブナのドングリが手に入り、トチノキ・クルミ・ツノハシバミ・ハイヌガヤなどの木の実も利用できたと考えられます。早春~秋に咲く野生の草花の美しさに感動しながら、ウド・タラノキ・フキ・オケラ・ツリガネニンジン・シオデなどの林床・林縁・草原などに豊富に生育する山菜を利用し、初夏から秋には、カスミザクラ・ガマズミ・アケビ・マツブサ・サルナシ・ズミ・ヤマボウシ・マタタビ・クサボケ・マメガキ・ナワシロイチゴ・モミジイチゴなどの果実やキノコを味わいながら豊かな食生活をしていただこう。

中村英夫



12 四阿屋山麓のミズナラ林



13 四阿屋山麓の秋
クスギ、コナラなどの雑木林(手前)

周辺の遺跡

谷あいには点在する縄文遺跡



14 犀川右岸の生坂村東部八幡原遺跡の土器
東畑遺跡と同時期の遺跡で、土器のかたちも似ているものが多い。



15 東部八幡原遺跡の砥石*
長さ21.0cm、大きな砂岩を砥石に使っている。砥ぎ痕から、石のアクセサリーや骨製品を砥いだ道具と考えられる。

筑北の地で最も古い人の足跡（遺跡）は、四阿屋山の山腹、標高900mの高原地形に位置する坂北村の東山にあります（110）。畑地から旧石器時代の安山岩製の石刃が発見されています。1万数千年以上前、まだ土器をもたない彼らは卓越した技術でつくった石器を使って狩猟生活を送っていました。その後、同じような高所を中心に少しずつ旧石器人の足跡を追うことができます。（90、96）

土器を用いる縄文時代の人々の足跡も、まず聖高原一帯の標高が高い範囲にみつかります（105～107他）。今から1万年ほど前、人々はキャンプ生活をして暮らしていたようです。

その後、今から7,500年前、人々は麻績川に近い、河岸段丘上に安定した集落「ムラ」をつくります。

その代表的なムラ、坂北村向六工遺跡（41）では5軒の竪穴住居跡*とともに、底の尖った土器、多種多様な石器が出土していて、山河の幸を得て豊かに暮らしていたことがわかってきました。また遠く和田峠周辺から黒曜石がもたらされていたことも科学的に証明されています。

前期になるとその遺跡数は少しずつ増えて、山腹の高所にある遺跡（9、46、52他）と、川沿いに点在する遺跡があります。

東畑に人々が暮らしはじめた前期の終わり、6,000年ほど前になるとムラは川沿いに分布します。同じ頃、犀川流域にも生坂村東部八幡原遺跡（155）などのムラが営まれていきます。

中期になると、さらに遺跡数は増え、麻績川やその支流の各所に規模の大きな集落がつけられていくようです。



16 向六工遺跡

平成1・2年、長野自動車道建設に伴う発掘調査によって縄文時代早期の集落や平安時代、中世の集落がみつかった。土器は先が尖った尖底土器である。



17 東条川左岸の本城村唐前遺跡の土器
本城村の指定有形文化財。昭和45年の構造改善事業で出土した無傷の埋甕。高さ41.5cm。縄文時代中期後葉の唐草文土器*である。

18 麻績川右岸の麻績村下井堀遺跡の土器
高さ12.0cm。縄文時代中期では珍しい壺形の小さな土器である。唐草文土器である。

本格的な調査はされていませんが、東条川沿いのムラ、唐前遺跡（22）や麻績川沿いのムラ、下井堀遺跡（60）などから当時の貴重な土器がみつかっていて、東畑遺跡と同規模の遺跡が眠っている可能性が膨らみます。

特に東畑遺跡のある仁熊地区では500mおきに東から淵平、東畑、菖蒲田遺跡が並び、お互いに協力関係のあったムラ同士だったのかもしれない。

後期になると途端に遺跡は減少します。しかし東畑のように調査をしてはじめて後期の土器や敷石住居跡がみつかる例も多いので、まだまだ遺跡の数や内容は未知数です。本格的な遺跡の分布調査を行えば、筑北における縄文時代の人々の暮らしぶりはいくらも明らかになることでしょう。

→巻末 坂北の歴史年表、文化財マップ（折込図）へ

※本文中の（ ）内の数字は巻末の「筑北地区の遺跡・文化財マップ」に対応しています。遺跡地名表とともにご覧ください。みなさんのお宅の近くにも昔の人たちの足跡が残っていませんか。

第2章

集落のくらし



東畑遺跡に生きた縄文時代の人々は、いったいどんな生活をしていたのでしょうか。集落遺跡には当時の人々の生きた証がたくさん残されています。そこは縄文時代の生活や社会の情報が満ちた場所です。

たくさんの土器や石器といった道具類、また住居跡や穴といった生活の跡から、自然と共生し集落を営んだ先人の姿がみえてきます。また土偶やアクセサリーといった道具からはその豊かな感性、精神性が伝わってきます。今回みつからなかった動植物を利用した道具や、多くの種類の食べ物もたくさんあったことでしょう。



遺跡の微地形と基本土層

砂質に富む水はけの良い土地

遺跡の標高は561m。現在の麻績川から約13m上った台地上にあります。縄文時代の生活跡は、台地東側の先端付近にみつかりました。このあたりの土は砂質に富んでいるので、とても水はけが良いです。発掘調査の時も、激しい夕立でできた水たまりがあつという間に引いてしまいました。

それに対して、遺跡の西側には生活の痕跡はみつきりません。一見すると同じような平らな場所ですが、地面を掘ってみると、粘土質の土が厚く堆積していて、すぐに水が湧き出てきます。地形も少しずつ傾斜して低くなっています。

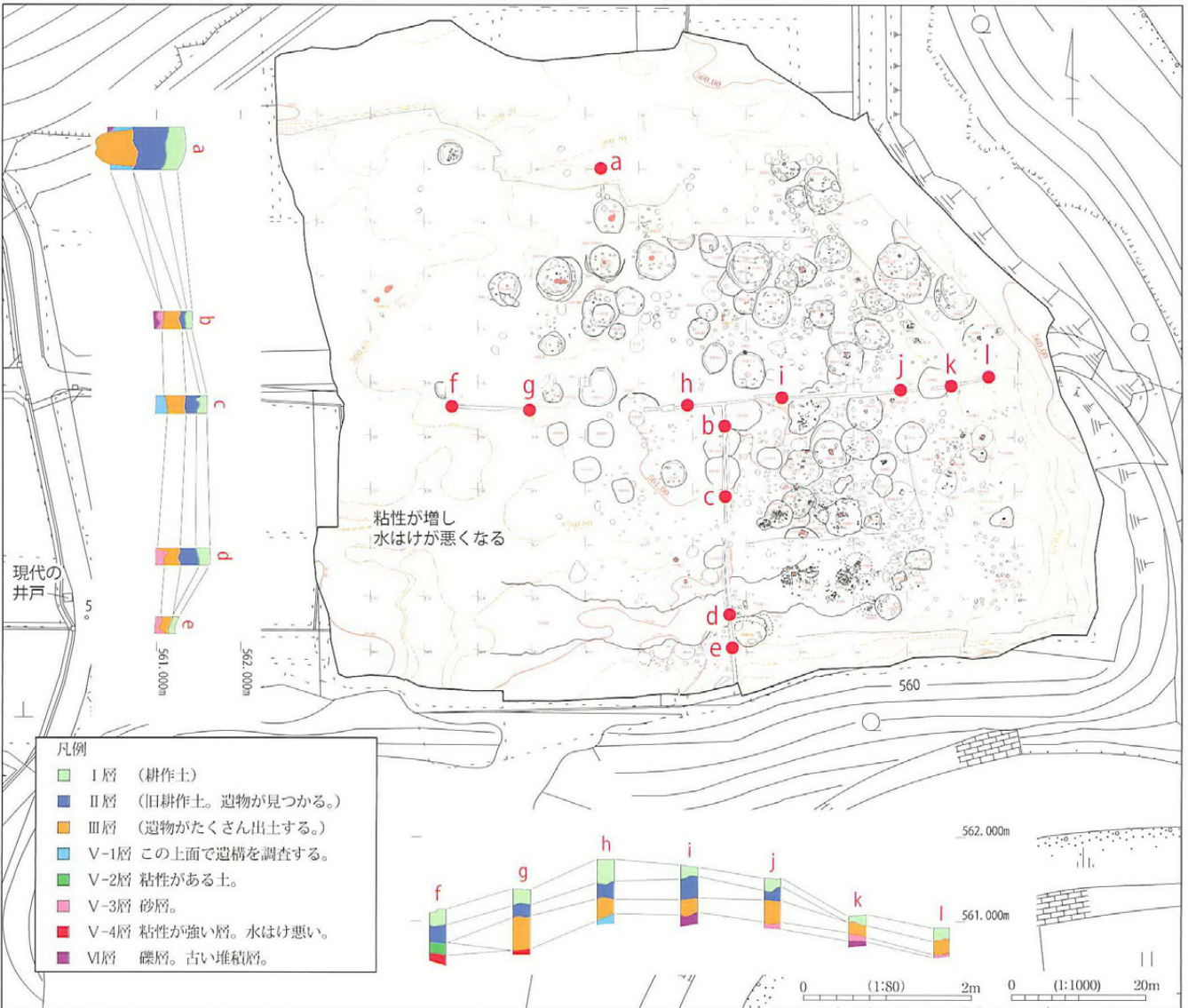
縄文時代の人々は堅穴住居という半地下式の家に住んでいましたから、水はけが良くて、住みやすい場所を選んでムラをつくっていたのでしょう。

坂北村東畑遺跡基本層序

- I層： 現在の水田耕作土。全体に溶脱傾向、下層境界に酸化鉄の集積。畑地や荒地では粘性のある黒褐色土。
- II層： 旧畑地の耕作土。粘性のやや弱い暗黄褐色土。遺物分布する。
- III層： 遺物包含層。粘性のある、やや砂質の暗黒褐色土。縄文時代の遺構覆土の主体層成層。
- IV-1層： IV-2層上位の土壌化層。IV層の砂利を含む粘性土。III-IV層。
- IV-2層： 自然堆積層。2cm以下の玉砂利層。不連続に分布。調査区南東に多い。III-V層。
- V-1層： V-3層上位の土壌化層。III-V-1層。
- V-2層： V-4層上位の土壌化層。粘性に富む。III-V-2層。
- V-3層： 自然堆積層。中粒の均質な砂層。台地中央部に堆積。地形傾斜部では削られて残らない。III-V-3層。
- V-4層： V-3層土が粘土化している層。調査区東から西側に向かって次第に粘性を増していく。水はけが悪く、遺構は存在しない。III-V-4層。
- VI層： 自然堆積層。30cm以下の垂直礫の層。V層とともに台地形成前の水成堆積層と考えられる。III-V層。
- VII層： 基盤層。砂岩泥岩の互層。新第三紀吉本層に相当。褶曲、断層顕著。縄文時代後期の数石住居の石材に利用されている。III-V層。

19 遺跡に堆積した土

はるか5,000年前といっても、東畑遺跡では地表下20~30cmで遺構がみつかると。



20 微地形と土層の堆積状況

縄文時代の足跡を探す

調査の進め方と遺構のみつけ方

縄文時代の人たちが遺跡に残した痕跡を「遺構(いこう)」といいます。また出土する土器や石器を「遺物(いぶつ)」とよびます。

発掘調査は地中にある遺構や遺物を見つけ、その情報をできるだけ細かく記録する作業の繰り返しです。

東畑遺跡の調査の段階を写真でみてみましょう。



22 重機による表土剥ぎ
土器のかけらが出てきたぞ。



23 遺構や遺物を見つける。
ぼんやり浮かぶ黒い染みは穴の跡だ。



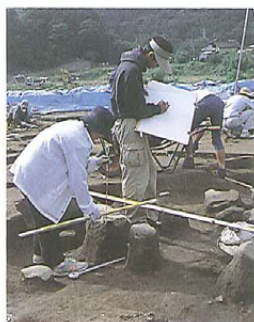
30 土器が埋まっていた。
縄文の人が埋めた土器を掘り出す。



29 火を焚いた跡。
近くでとれる砂岩を組んで炉にしてたんだ。



24 丹念に遺構を探す。
炉の石が出てきたよ。



31 記録をする。
みつかった状態をていねいに記録する。



28 敷石住居っていうんだ。
鍵穴のような形に石を並べた家の跡だったんだ。



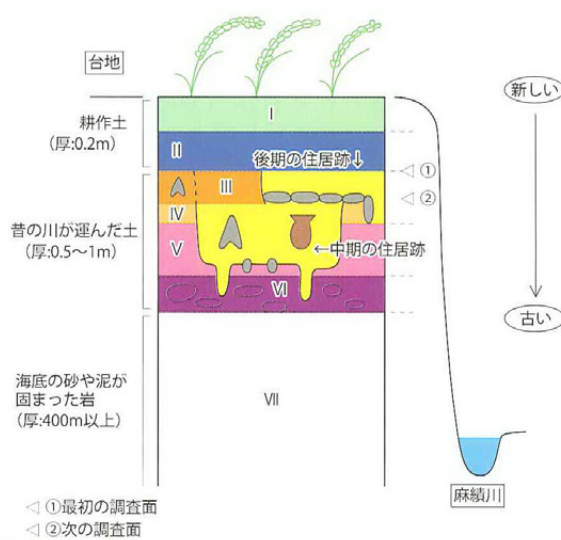
25 平らな石はなんだろう。
田んぼの土のすぐ下に並んでいる。



26 どこまで石はあるかな。
平らに削っていくと、石の集まりがわかる。



27 土をはがしていく。
縄文人との対話の瞬間。



21 東畑遺跡の地層模式図

一般に地層は上に行くほど新しく、下に行くほど古い。遺跡で見つかる遺構も同じことがいえる。

みつかった足跡とその性格

当時の人々が掘った穴の数々

調査を進めていくと、大小の穴がたくさんみつかりました。この大地を掘りくぼめた穴の数々こそが、縄文時代の人々が暮らした足跡（遺構）です。

穴には大きくて底が平らなものや、細く深い形、また石を敷き詰めてある例もあります。その形状や規模、穴を埋めていた土に含まれる遺物などから、半地下式の住居、柱を組んだ建物やお墓と考えられる穴や食べ物などを貯めておいた穴などに分類が可能です。

分類した穴を細かく観察すると東畑ムラの暮らしぶりがみえてきます。ここではその特徴を種類ごとに紹介します。

たてあなじゅうきょあと

竪穴住居跡（記号・・・SB、SH）

おおむね3～6m位の円形や楕円形で、底が平らな穴は、当時の住居跡です。平らな底の部分が床にあたります。床の真ん中あたりには煮炊きをした炉



33 竪穴住居跡

丸く半地下に掘りくぼめた住居跡。壁の近くにある穴に柱を建てていた。



35 火を焚いた跡

石で組んだ炉。麻績川から拾った石を使っている。

遺構の種類	数	内容	記号
住居跡	120	竪穴住居跡、敷石住居跡など	SB、SH
建物跡	1	掘立柱建物跡	ST
穴（土坑）	740	お墓や貯蔵穴、大小の穴	SK
その他	4	単独で出土土器など	SX

32 遺構の数

調査では住居跡をSB、建物跡をST、穴をSKといった記号と登録番号で管理する。

があって、周りには柱を建てた穴がみつかります。東畑遺跡では120軒もの竪穴住居跡がみつかりました。住居跡を埋めている土から土器や石器もたくさん出土します。当時も住居は生活の中心ですから、ここには縄文時代の人たちの生きた情報が残されています。その情報を逃さないように調査をしています。



34 竪穴住居跡

東畑遺跡では重なり合ってみつかることも多い。



36 石で組んだ炉

砂岩の大きな石を四角に組んでいる。深さ39cm。大きな炉である。

しきいしじゅうきょあと

敷石住居跡 (記号・・・SB、SH)

竪穴住居の床に平らに石を敷き詰めている例があります。東畑遺跡でも8軒みつかりました。これを敷石住居跡とよびます。縄文時代中期の終わりから後期中葉に中部地方から関東地方西部を中心に流行した住居の種類です。当時、東畑にも同じ文化をも

った人たちが暮らしていました。麻績川周辺に多く分布する砂岩や泥岩ばかりではなく、角張った硬い火山岩も運んできています。それらを上手に組み合わせて床に敷き詰めています。なぜ石を敷いたのか、縄文時代の人々の考えや目的はまだわかっていません。



37 敷石住居跡 (縄文時代後期初頭)

平らな砂岩や火山岩をきれいに並べている。



38 炉の跡

四角い炉である。炉石もよく焼けている。



39 敷石住居跡 (縄文時代後期前葉)

石がない部分もある。柄鏡形をしている。この住居の下から縄文時代中期の住居 (SB060) がみつかった。



40 炉の跡

麻績川の石を丸く並べている。みえている土器は炉の一部として二次利用している。



ほったてばしらすたてものあと

掘立柱建物跡 (ST)

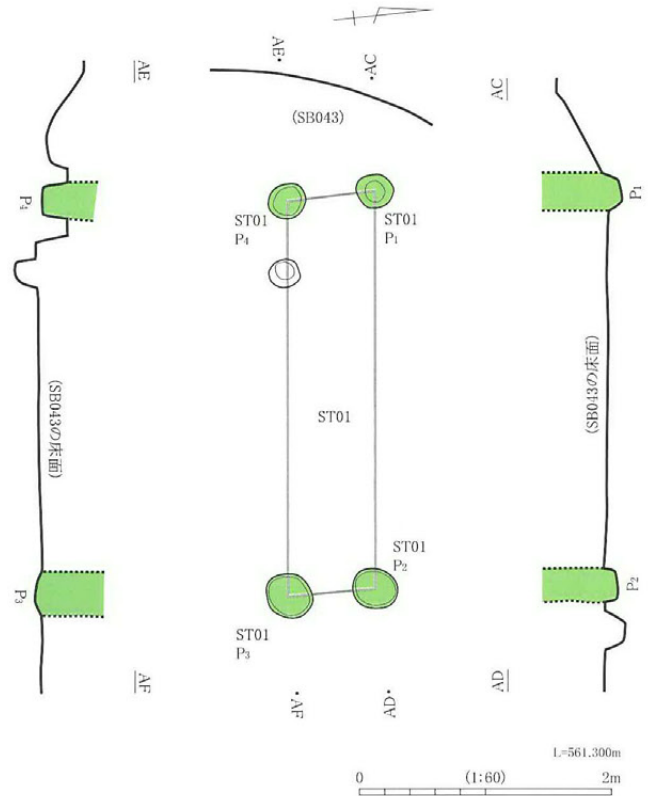
住居の柱を建てた柱穴とよく似た穴が住居以外の場所からみつかることがあります。この柱穴が長方形に一定間隔で並んでいる場合、そこにはそれぞれの柱を組んで、高床や地面を床にした建物があったと考えられています。どんな上屋を支えていたのでしょうか。



41 建物の跡

ピンが立っている穴に柱を4本建てていた。縄文時代中期の住居の上に重なっている。

ST001 建物跡実測図 (1:60)



ST001 建物跡は古い住居 (SB043) が埋まった後に建てられている。

どこう
土坑 (SK)



42 大きな穴

深さも大きさも1mほどもある穴。貯蔵穴だろうか。



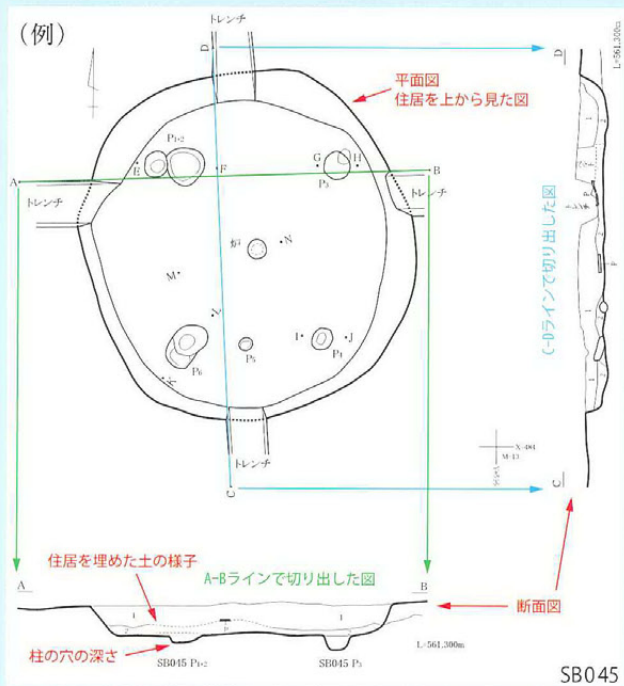
43 石が投げ込まれた穴

石皿や石を投げ込んでいる。右にあるのは磨製石斧。

小さな穴(竪穴)の総称が土坑です。東畑では740個も発見されました。形も大きさもさまざまですから、用途もお墓であったり、貯蔵穴であったり、建物の柱穴であったりと多種多様だったことでしょう。

実測図面の見方

遺構に残された情報を図化することで、調査に立ち会えなかった人もその情報を共有できます。遺物の実測図も写真ではわからない情報を盛り込みます。



44 遺構の図面

掘り出した状態を細かく図面に表す。竪穴住居跡などの大きさや形、深さ、埋まっていく状態を記録する。

縄文時代とは・・・

長い氷河時代が終わると、世界各地で土器などの新しい道具がつくられるようになりました。

今から15,000年から13,000年前、気候が暖かくなって、海水面が上昇してきたため、これまで陸地の一部であったところが島となって、現在のような日本列島ができました。周囲の自然環境や動物、植物の種類も変わりました。それとともに人類の新しい生活がはじまりました。

そのころ、日本列島の人々がつくった土器の表面には縄目のような模様がついているものが多いので、その土器を縄文土器とよんでいます。ただ東畑遺跡のように棒や竹管、粘土紐で模様をつける例も多くあります。(40～43頁参照)

また木の実や、小形のけものや鳥、魚や貝などに恵まれていたので、人々は採集や狩りや漁によって多くの食べ物を得ていました。そしてムラをつくり、竪穴住居に住んでいました。このように自然と共生し、縄文土器を用いていたころの文化を縄文文化、その時代を縄文時代とよんでいます。

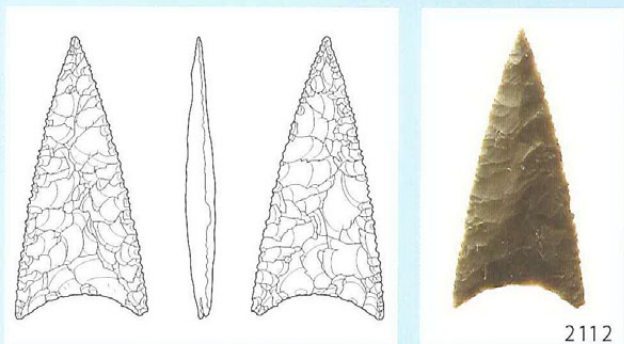
今のところ国内で最も古い土器の年代は、約15,000年前であるという研究成果が発表されています。また米づくりが行われる弥生時代は2,800年前にはじまるといわれていますから、縄文時代は12,000年間も続いたということになります。(66頁参照)

この縄文時代の人々が日本人の原型と考えられ、その後、大陸から移り住む人々と混じりあって、長い年月の間に、共通の言葉や文化をもつ日本人ができてきたと考えられています。



45 土器の実測図 (S=1:8)

土器を真横から見た状態。右側にあるのは断面図。土器の形状や模様を丹念に記録する。



46 石器の実測図 (S=1:1)

小さな矢じりも、よくみると細かな調整を繰り返していることがわかる。先人の緻密さに挑戦するとく、ていねいに観察する。



縄文時代前期の住居

はじめて暮らした人々

調査の結果、東畑遺跡に人々がはじめて住居をつくりはじめたのは、今から約6,000年前、縄文時代前期後葉であることがわかりました。

住居の時期は、竪穴住居跡から出土する土器の形の変化から判断します。(66・67頁参照)

未開の林を切り開いてきたのでしょうか。そのころの人々は台地の内側(北西寄り)に寄り添うように住居を建て、ムラをつくっています。

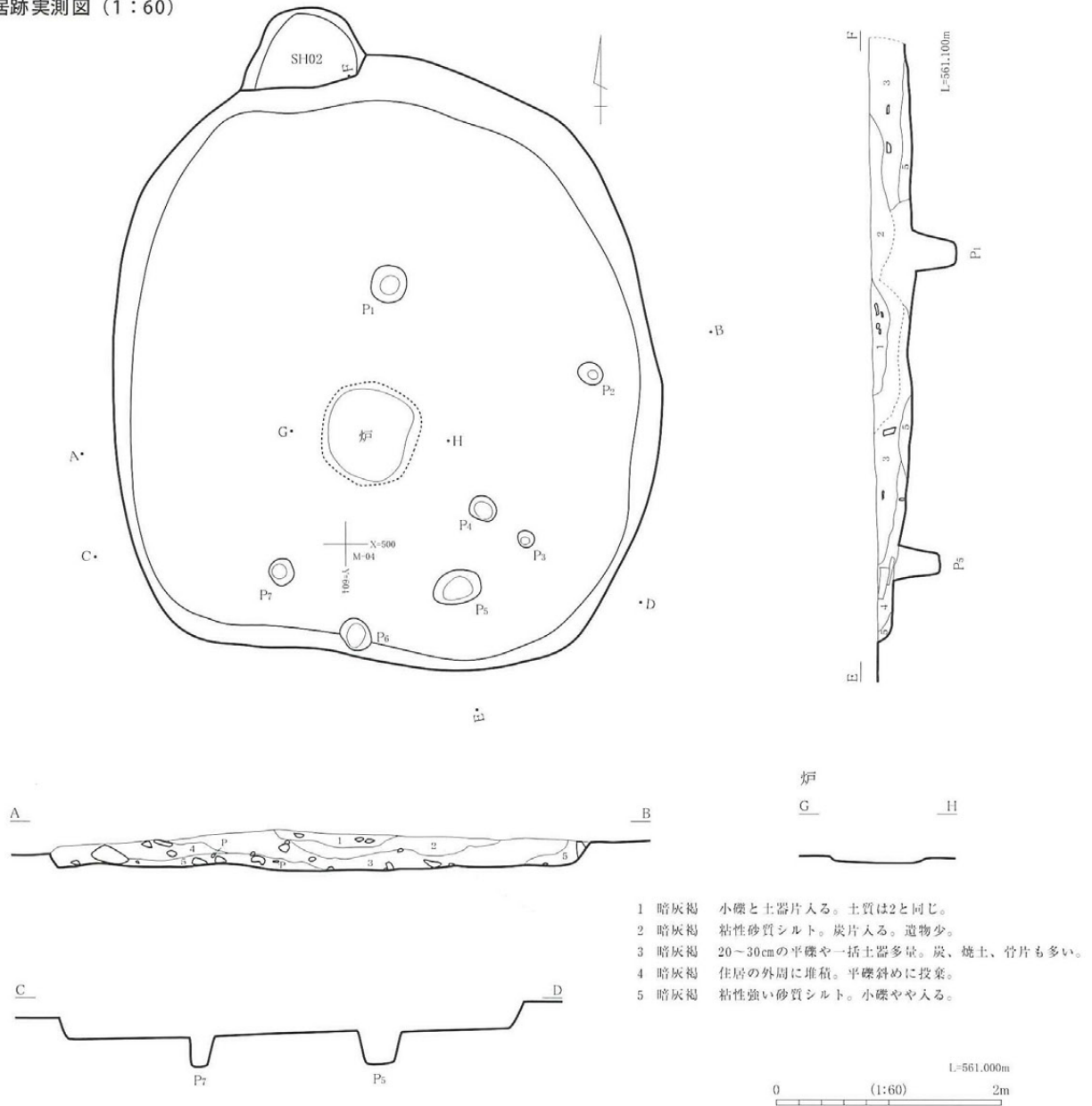
そのひとつ、SB053住居跡をみると、形は楕円形をしていて、壁はほぼ垂直です。床の南寄りにある炉は少し地面を掘りくぼめただけの「^{じしょうろ}地床炉」

です。その部分が火を受けて少しだけ焼けていました。

上屋を支える柱の穴は3ヶ所みつかっていて、炉を3角形に囲んでいます(P1.5.7)。どれも深さ30cmほどで細く深いのが特徴です。

また住居を覆う土から、たくさんの土器片や石器が出土しました。そのうち、復元された土器(P0544)は底部がない状態で高さ45.7cmもあって、この時期にはあまり例がない大きさです。多くの食べ物を貯めていたのかもしれませんが。

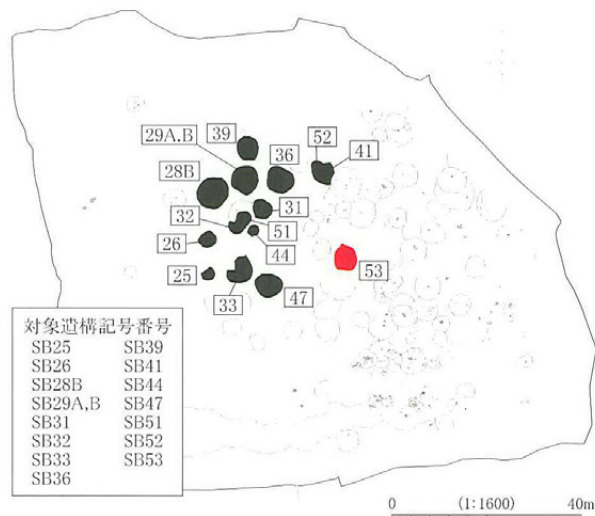
SB053 住居跡実測図(1:60)



データ

住居番号：SB053
 調査：記録保存
 位置：調査区の中央、台地の内側
 かたち：楕円形
 大きさ：縦5.36×よこ4.84m
 壁の様子：ほぼ直立
 床の様子：地面をならしている。
 炉：地床炉
 ピット数：7
 主な柱穴：P1,5,7
 出土土器：26,548g
 石器：8,175g
 骨片：31.1g
 住居が使われていた時期：縄文時代前期後葉I(古)
 (根拠：住居の形や出土した土器から)

この住居の位置(縄文時代前期後葉I)



47 遺物の出土状況

おびただしい数の土器や石器、石が出土した。



P544

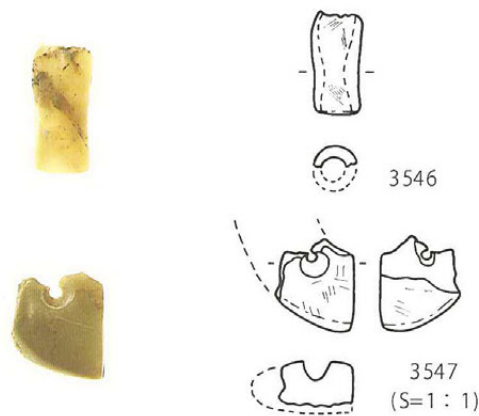
48 復元された土器

高さ45.7cmもある大きな土器。器厚は5mmほどと薄い。



49 出土した土器

石匙や磨製石斧がめだつ。右下(3323)は長さ17.3cm。



50 アクセサリー類

上：滑石製の管玉(長さ1.4cm)。
 下：滑石の塊状耳飾(長さ1.7cm)。よく磨かれている。

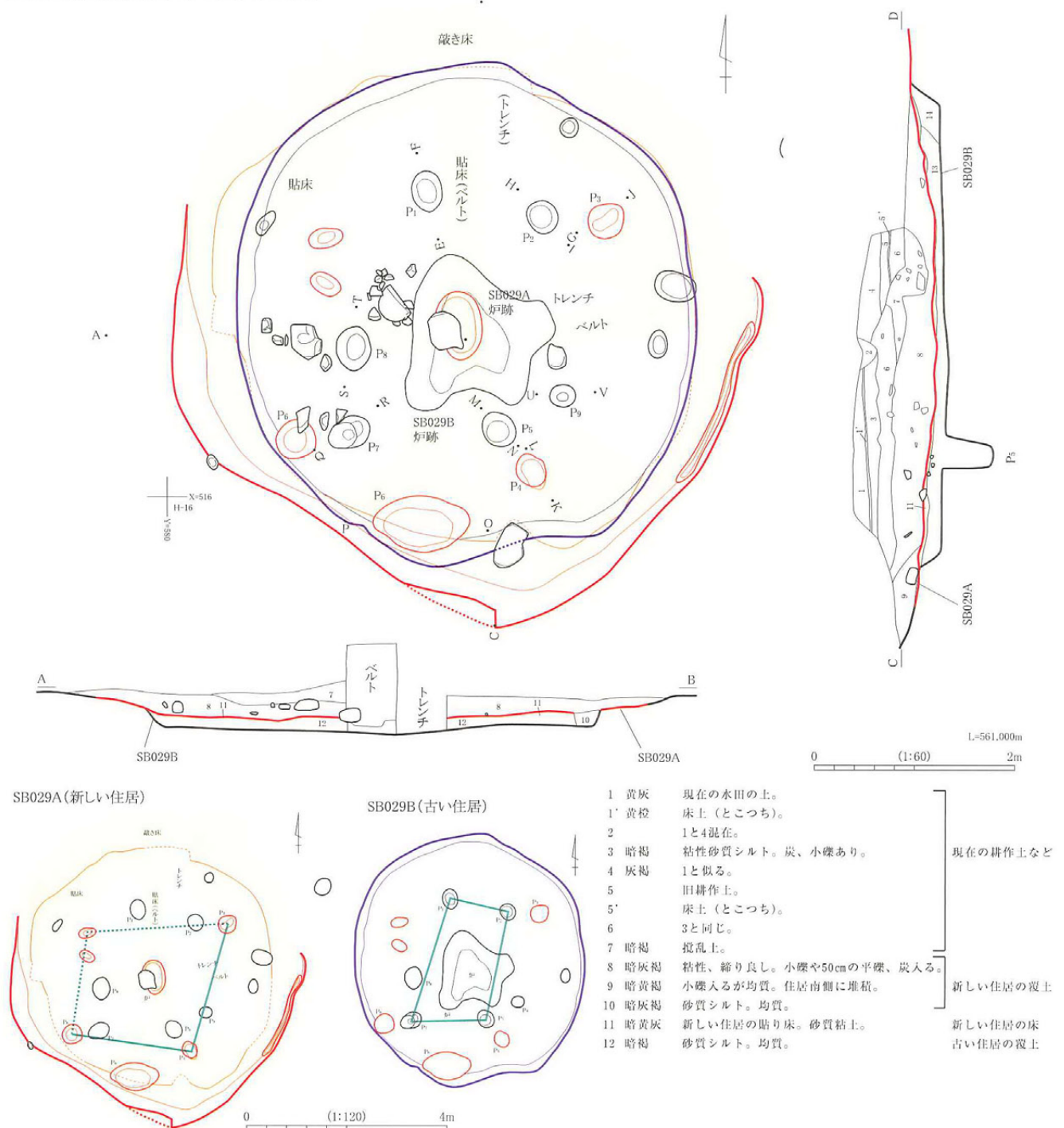
建て替えられた住居

SB029住居跡のトレンチ調査をしていると、トレンチの壁に薄くて堅くしまった平らな層(下図：11層)がみつかりました。さらにその下には地面を平らにした床が出てきました。まず堅い11層上を掘り広げると、凹凸はあるものの、平らな面が出てきます。また真ん中には炉もみつかりました。そして下にはもう1軒、地面を床にした住居がみつかりまし

た。どうやら一度埋めた住居の土に床を貼って、暮らしていたようです。

出土した土器を比べてみると、新しい住居(SB029A)も古い家(SB029B)も同じ種類で、時期差はありません。このように同心円状に住居を建て替えることが縄文時代にはあったようです。

SB029 住居跡実測図 (1:60、1:120)



データ

住居番号：SB029A・B 調査：記録保存

位置：調査区の北寄り、SB028の東隣。

SB029A（上にある新しい住居）

かたち：楕円形？

大きさ：縦(6.00)×よこ5.80m

壁：不明 床：古い住居の覆土に床土を貼る。

炉：地床炉

主な柱穴：4個

覆土：小さな石や50cmもある大きな石が入る。

SB029B（下にある古い住居）

かたち：楕円形

大きさ：縦4.60×よこ4.52m

壁：直立 床：地面をならしている。 炉：地床炉

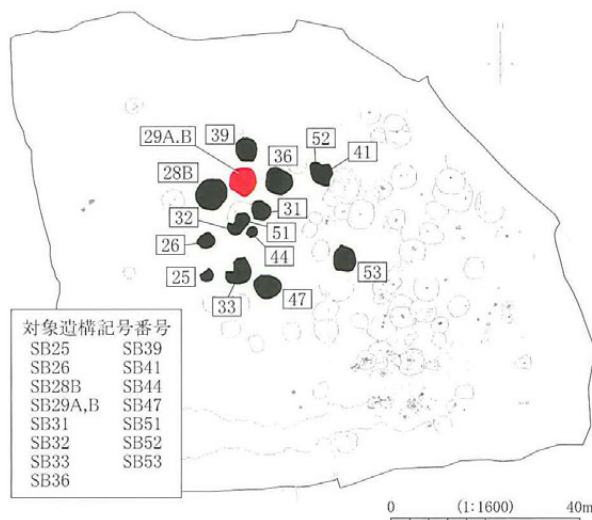
柱穴：4個 覆土：均質な砂質土。

土器(A・B)：3,650g 石器：1,741g 骨片：なし

住居が使われていた時期：縄文時代前期後葉I(新・古)

(根拠：住居の形や出土した土器から)

この住居の位置(縄文時代前期後葉I)



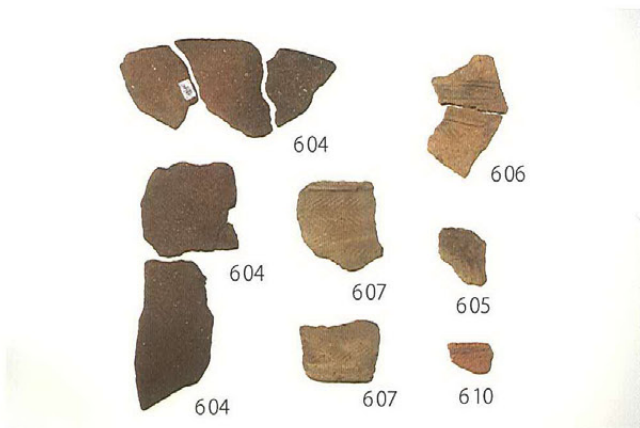
51 堆積の状況

下の家を埋めた土に床を貼っている。



52 上の住居の状況

部分的に貼った床をみつけた。大きな石も出土している。



53 出土した土器

土器はかけらがが多い。上下の家で土器の時期差はない。

右上(606)は縦10.8cm。



54 出土した石器

3545は大形の磨製石斧(長さ14.1cm)。木を切り倒す道具である。

同じ場所に重なる住居

SB028住居跡もほぼ同心円状に2軒の住居が重なっていました。上の住居の床層（貼り床*）は、とても薄く不安定だったので、「もしかしたら床ではないのかな？」と少々自信なく調査を進めました。

しかしその床面に小さな石囲炉がみつかって、間違いなく住居跡であることがわかりました。

次に下の住居跡を掘り広げると、床に地床炉がみつかりました。また柱の配置も上の住居は6本柱、

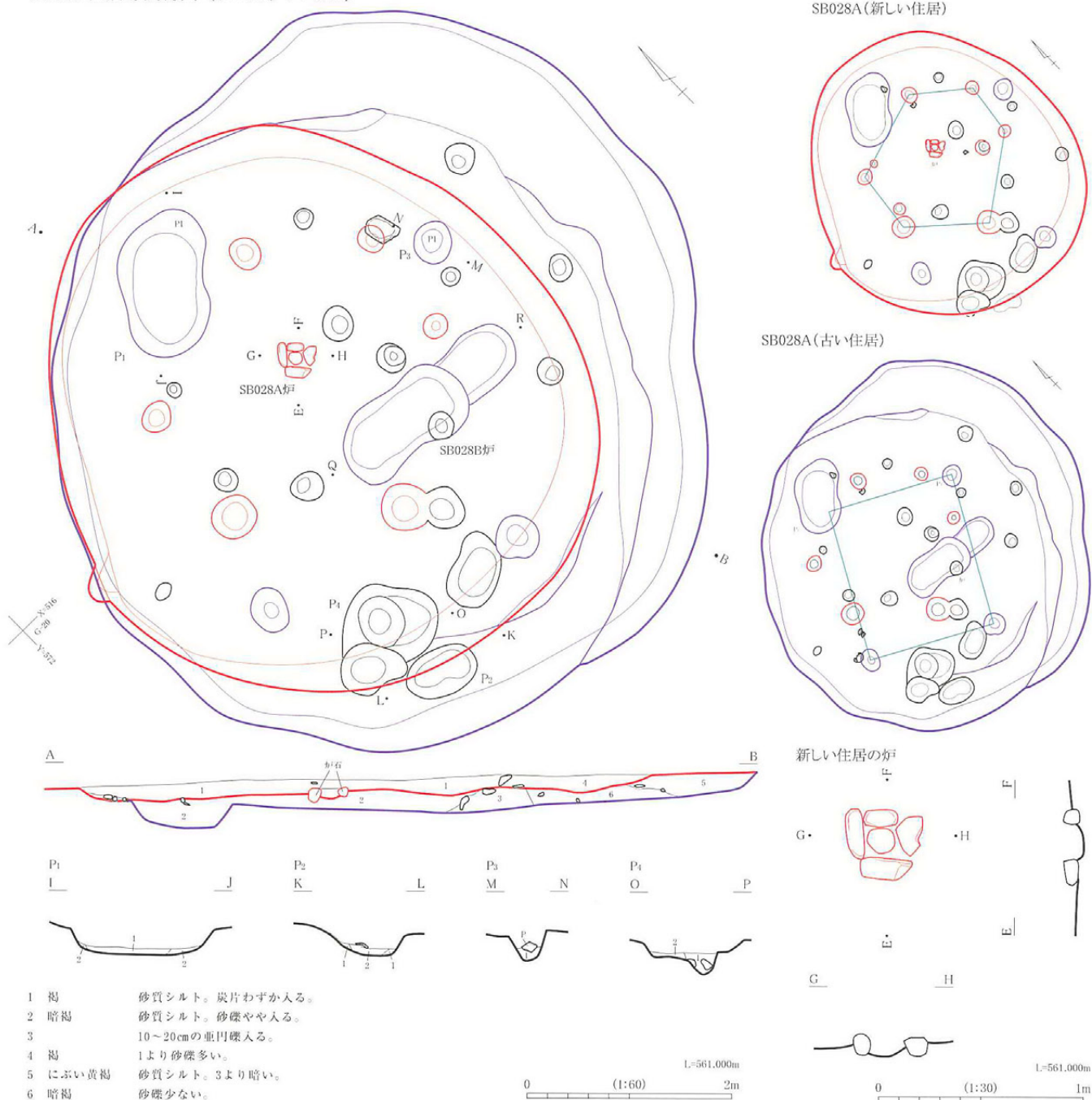
下の住居は4本柱と違いがあることがわかりました。

下の住居の時期は、住居の特徴と土器から前期後葉であることがわかりました。

上の住居は覆土が薄く、ほとんど土器が出土していませんが、石囲炉と6本柱の配置という特徴を他の住居と比べてみると、中期中葉にあてはまる可能性が高くなりました。

東畑のように、長く続いたムラでは同じ場所に数百年後に再び住居が建てられることがあります。

SB028 住居跡実測図（1：60、1：120）



データ

住居番号：SB028A・B 調査：記録保存。

位置：調査区の北寄り、SB029の西隣。

SB028A（上にある新しい住居）

かたち：ほぼ円形

大きさ：縦(5.44)×よこ(5.40)m

壁：ゆるい傾斜

床：古い住居の覆土に床土を貼る。 炉：石囲炉

主な柱穴：6個

覆土：砂質のシルトで炭片が入る。

時期：縄文時代中期中葉Ⅲ～Ⅳ

SB029B（下にある古い住居）

かたち：ほぼ円形 大きさ：縦(7.20)×よこ(6.40)m

壁：ゆるい傾斜 床：地面をならしている。

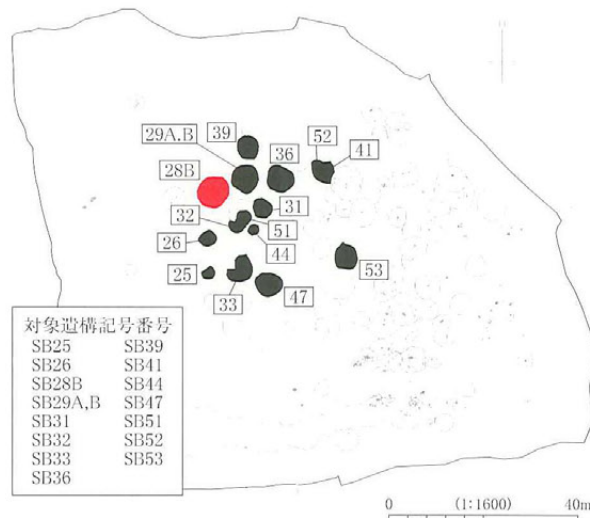
炉：地床炉 柱穴：4個 覆土：部分的に石が混じる。

土器(A・B)：5,206g 石器：8,735g 骨片：なし

住居が使われていた時期：縄文時代前期後葉Ⅰ(新・古)

(根拠：住居の形や出土した土器から)

この住居の位置(縄文時代前期後葉Ⅰ)



55 上の住居の状況

石囲炉とわずかに貼り床が残っている。



56 上の住居の状況

小さな石で組んだ炉。麻績川の石だろう。



57 下の住居の状況

炉はわずかに地面を掘りくぼめただけである。



58 出土した土器

下の住居の土器。縄文時代前期後葉の土器のかけらである。右上(625)は縦8.5cm。

縄文時代中期の住居

炉に土器を使う

東畑遺跡に縄文時代の人々が暮らした1,500年間には、住居の形ばかりではなく、炉の形も変わってきます。前期までは地床炉がほとんどでしたが、中期になると炉に土器を再利用しています。

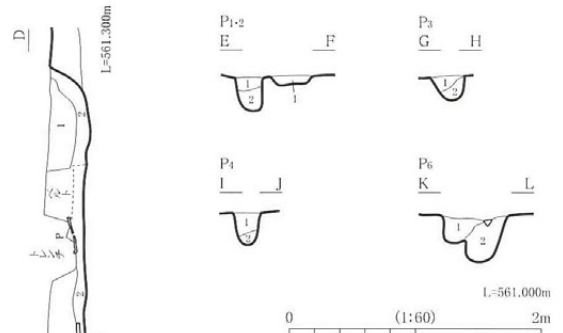
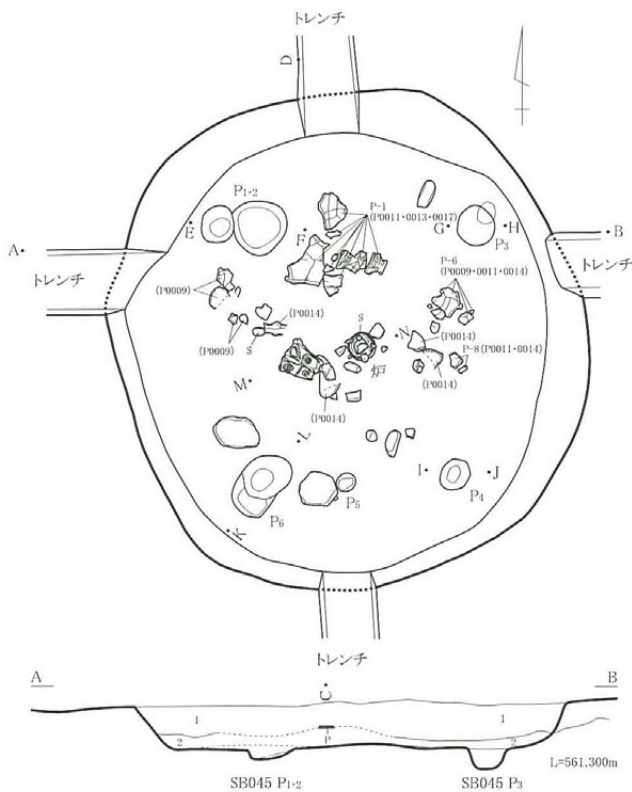
煮炊きに使っていた土器の胴部をきれいに割って住居の床の真中に埋めます。このような炉を「埋甕炉」とよびます。よくみると土器の縁が火を受け

て変色したり、剥がれていたりしていますが、それほど強い火を受けている痕跡はありません。

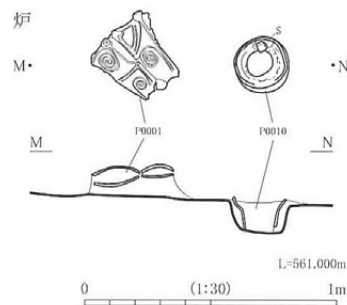
埋められた土器には、囲炉裏のように灰が入れられて、その上でおきびが赤く燃えていたのでしょう。

埋甕炉は次第に石囲炉へ、つぎに石組炉へと移り変わっていきます。

SB045 住居跡実測図 (1:30, 1:60, 1:120)



- 1 暗褐色 粘性強い砂質シルト。骨片、土器片、石片多量。
- 2 黒褐色 砂質シルト。炭やや入る。
- P1-2 1 暗褐色 砂質シルト。
- P1-2 2 1より暗い。
- P3 1 暗褐色 数cmの礫含む。しまりよし。
- P3 2 P3 1よりしまり弱。
- P4 1 P3 2と似る。
- P4 2 P4 1より明るい。
- P6 1 暗褐色 黄色ブロックあり。
- P6 2 暗褐色 10cm前後の礫。1よりも粘性あり。



59 炉の状態

胴の下半部を壊した土器を炉に転用している。



60 炉体土器

北陸地方の影響を受けた土器である。高さ13.9cm。



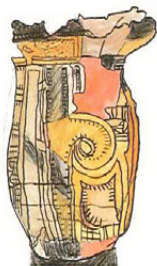
61 炉と土器

渦巻き文が特徴の土器。底が抜けた状態で出土した。

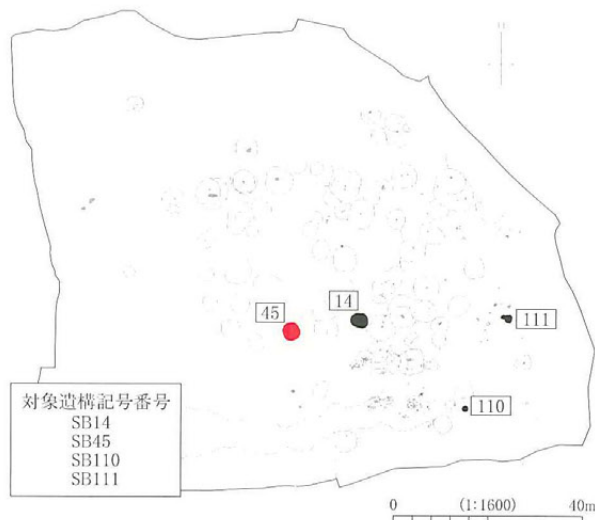
データ

住居番号：SB045 調査：記録保存・盛土保存
 位置：調査区の中央。やや南寄り。
 かたち：楕円形 大きさ：縦3.94×よこ3.78m
 壁の様子：直立気味 床の様子：全体に平らで堅い。
 炉：埋甕炉 柱 穴：4個
 入口部：小さな穴がある。梯子をかけた穴か？
 覆土：上～中層に土器片や石片、骨片が多量に入る。
 炉のすぐ上から底の抜けた深鉢出土。
 土器：27,576g
 石器：3030g 骨片：373.2g
 住居が使われていた時期：縄文時代中期
 中葉I

(根拠：住居の形や出土した土器から)
 主な遺物：北陸地方の影響を強く受けて
 いる土器がまとまって出土している。



この住居の位置 (縄文時代中期中葉I)



62 土器の出土状況

床より少し高いところから土器がまとまって出土した。



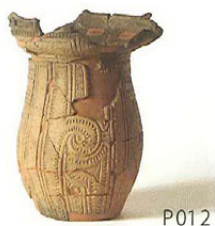
63 住居跡の完掘状況

こじんまりとした住居。4本の細くて深い柱穴がある。



64 出土した動物の骨

住居を埋める土からは動物の焼けた骨片が出土した。



65 深鉢形土器

これも北陸地方の影響を受けた土器である。高さ22.5cm。



66 浅鉢形土器

食べ物を盛り付けた土器。口縁部に細かな模様がある。高さ13.7cm。



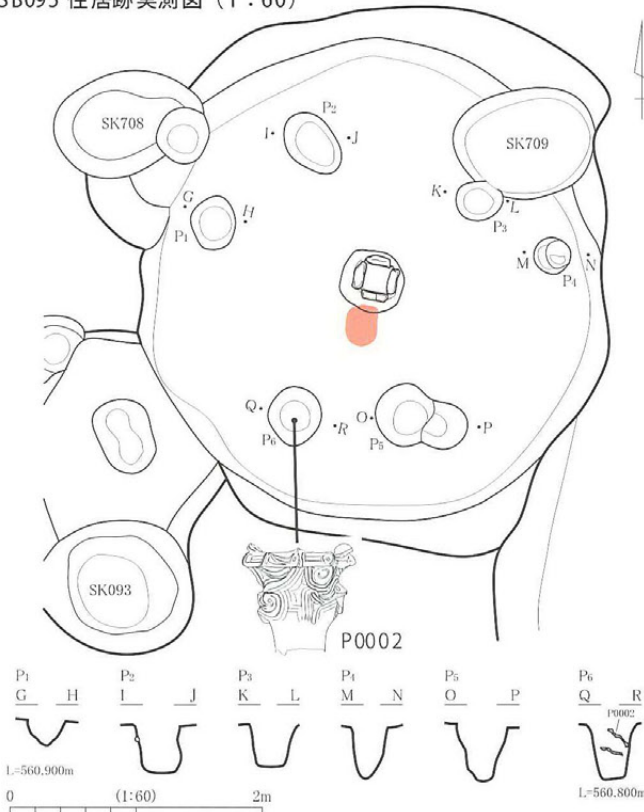
67 出土した石器

小形の石鏃 (1148ほか) や磨製石斧 (1151、長さ19.3cm)、打製石斧 (1169) など石器も豊富である。

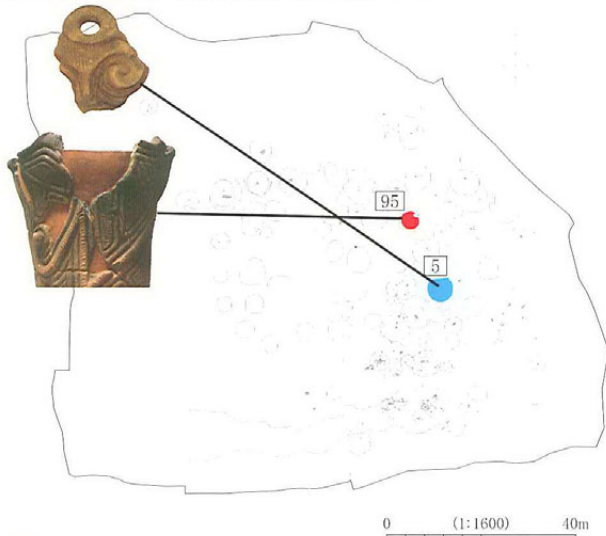
ひとつの住居、その始まりから終わり

地面を掘って住居をつくり、生活する。住居を離れるとき、柱を抜いて解体する。柱の穴には、今まで煮炊きに使っていた土器を納める。床や炉が土に埋もれる頃、土器や石器、石を放り込む。調査からわかる、住居に関わる人々の行動。そこには夜露をしのぐだけの場所ではない、住居の存在がみえてくる。

SB095 住居跡実測図 (1:60)



この住居の位置 (縄文時代中期中葉IV~V)



71 遺構間接合*の状況

少し離れたSB005住居から出土した人体文のかげらが接合した。



68 石囲炉

小形の川原石を四角く組んでいる。



69 遺物の出土状況

足の踏み場もないくらい土器や石が出土した。



P020

70 再会した土器

人体文だけが別の住居から出土した。偶然なのか。何か意味があるのだろうか。高さ29.2cm。



72 出土した土器

さまざまな模様や形の土器がまとめて出土した。中央上の土器は高さ24.8cm。



73 家族のだんらん



74 柱穴を探す

床面をきれいにして柱穴の跡を探す。真ん中が炉。



75 柱穴の調査

入口に近いピット6を半分に掘ると、完全な形の土器が顔を出した。



76 家の解体（柱を抜く）



77 柱穴に土器を納める

どんな思いがあるのだろうか。



78 土器の出土状態（ピット6）

完全な形ではなく、底だけが抜かれていた。



79 家を覆う土と遺物の状態

住居が埋まっていく途中で、石や土器が棄てられたようである。



80 廃屋へ土器を投げ込む

完全な形の土器もかけらも、大きな石も一緒に投げ込んでいる。

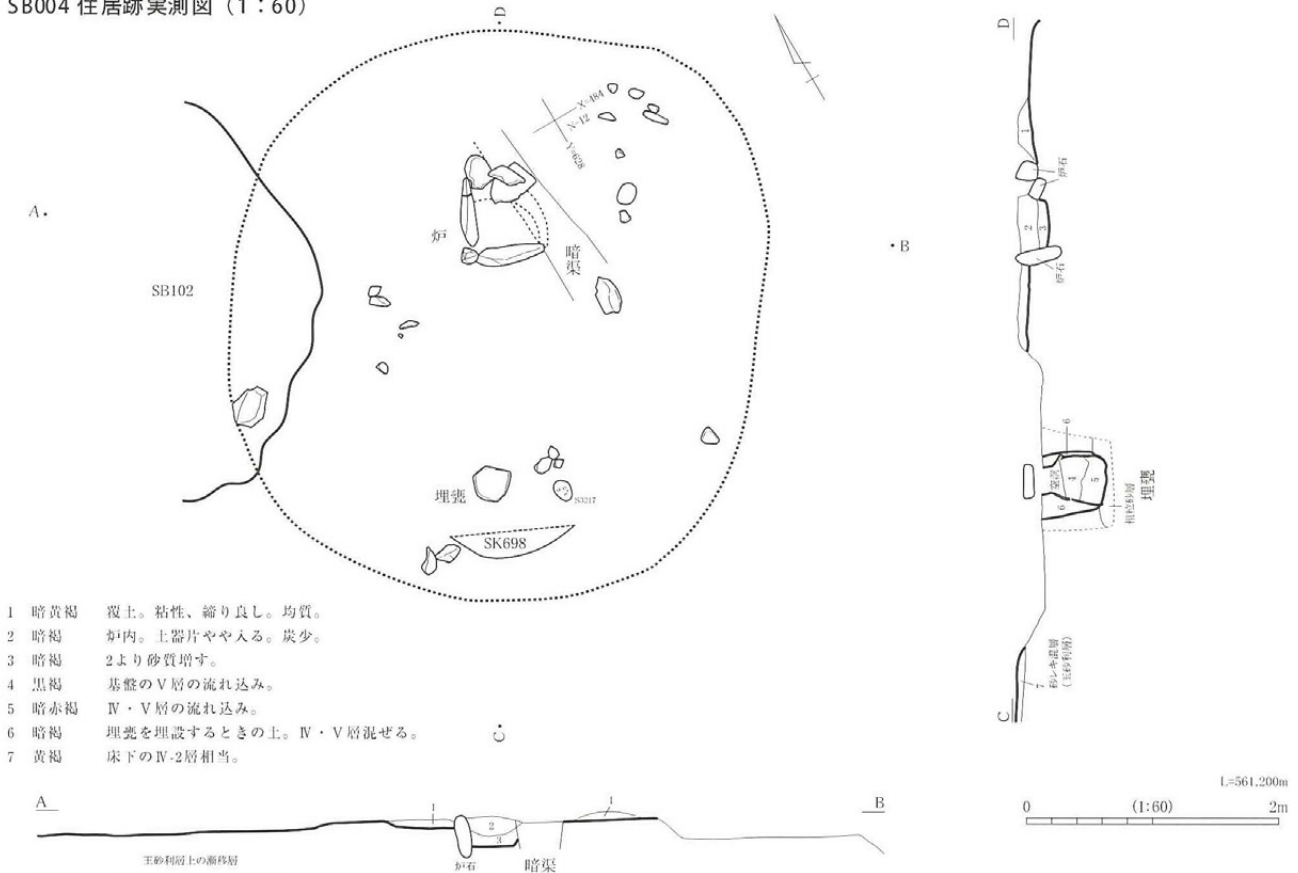
住居の床に土器を埋める

前期後葉の頃、人々は屋外の穴に底を抜いた土器を埋めています(34頁)。中期中葉になると、住居内に炉として土器を埋めるようになります(26頁)。

炉が石組炉に変わる頃、人々は柱を抜いた穴に底を抜いた土器を埋めたり、入口近くの床に土器を埋めたりするようになります(28・29・72頁)。

中期後葉になると、住居入口部の床に大きな土器を埋めるようになります。これを「埋甕^{うめがめ}」とよびます。底が割り取られた、ひとかかえもある土器をま

SB004 住居跡実測図(1:60)



81 炉と埋甕

炉の南側に埋甕がある。住居の入口にあたる。

っすぐ埋める例や少し斜めに埋めたりすることがあります。また、逆さまに埋める例、二つの土器を重ねて逆さまに埋める例もみられます。

埋甕の目的は明らかになっていません。しかし、水を入れて煮炊きに使った土器の底を抜き、その機能を停止させてから、わざわざ穴を掘って、壊れないように埋めるという行動の背景には、当時の精神的な考えが深く関わっていたと考えてよいでしょう。

データ

住居番号：SB004 調査：記録保存

位置：調査区の東側。麻績川寄り。

かたち：不明。大きさ：縦(4.80)×よこ(4.80)m

検出：炉石と埋甕を検出。住居の掘り込みは後世の耕作で、削られている。

床：不明。炉：石組炉

柱穴：不明 入口部：石蓋をした土器を重ねた埋甕あり。埋甕内の上部は空洞。下部の土も埋設後の流れ込みと考えられる。

覆土：薄く不明瞭。

土器：11,591g 石器：3,682g 骨片：1.0g

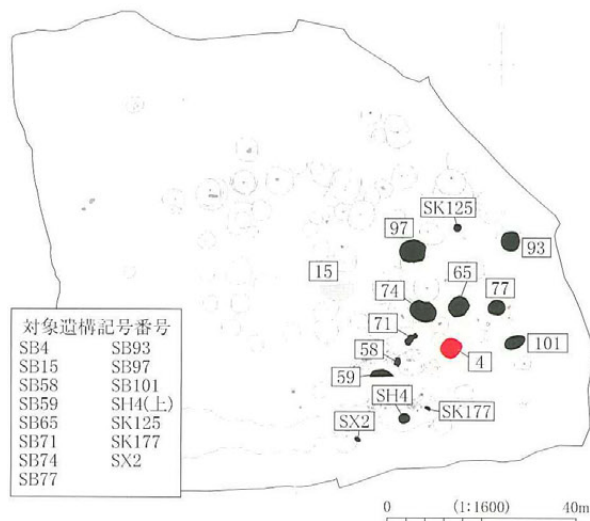
住居が使われていた時期：縄文時代中期後葉IV(古)

(根拠：埋甕の時期から)



82 埋甕の上の石蓋
平らな川原石が見つかった。

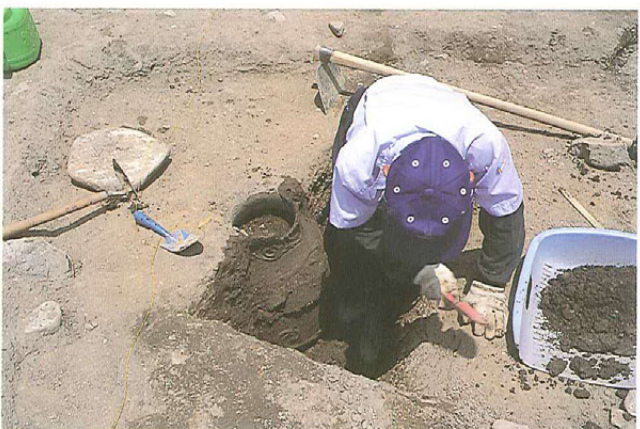
この住居の位置（縄文時代中期後葉Ⅳ）



83 石蓋を取り除いた状態
はっきりと土器が顔を出した。4,000年間空洞だった。



84 埋甕の状況
石蓋の下にひっくり返した土器を二つ重ねていた。



85 埋甕の取り上げ
土器を壊さないように慎重な作業が続く。



86 埋甕と石蓋
左の土器は犀川流域の土器。高さ35.5cm。右の土器は千曲川流域の土器。

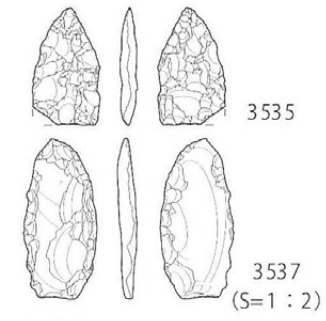
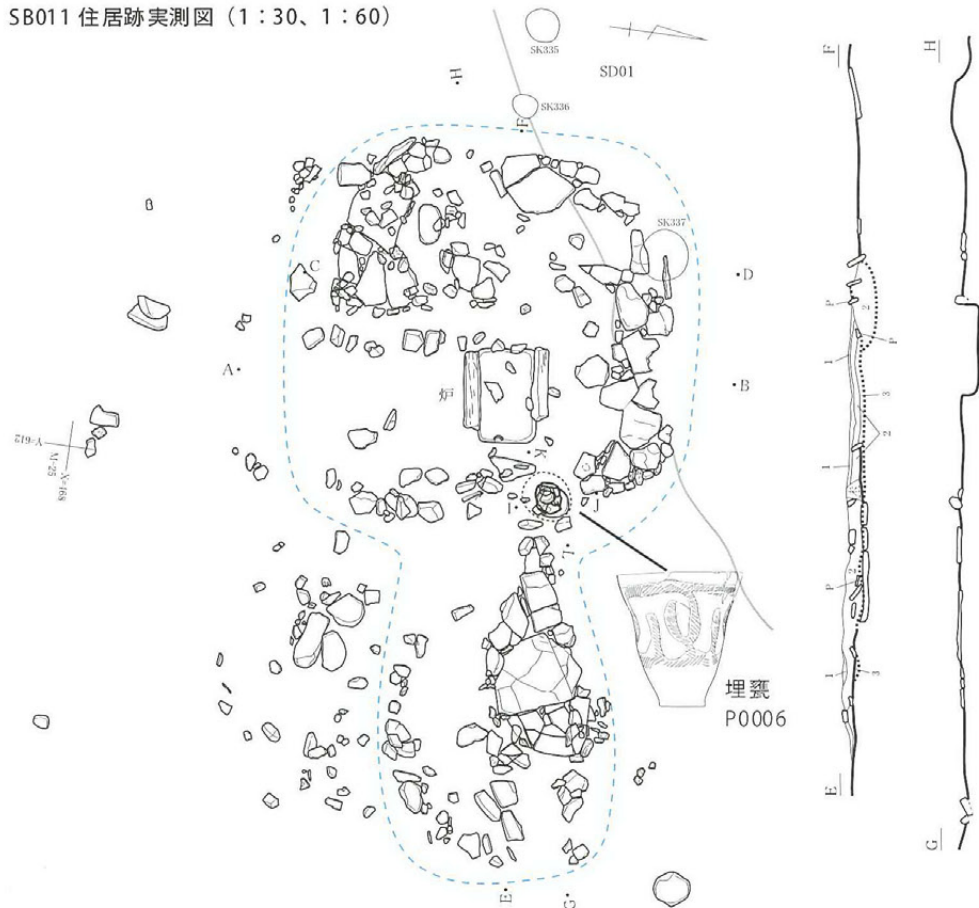
縄文時代後期の住居

石を並べた住居

後期になると、人々は住居の床に平らな石を敷き詰めます。この敷石住居跡は10軒みつかりました。東畑では耕作土のすぐ下に敷石が出土しますが、もともとは竪穴住居の床に石を敷いています。

石の並び方は柄鏡のような形をしています。柄の部分が入口にあたり、鏡の部分に住居空間にあたります。

SB011 住居跡実測図 (1:30、1:60)

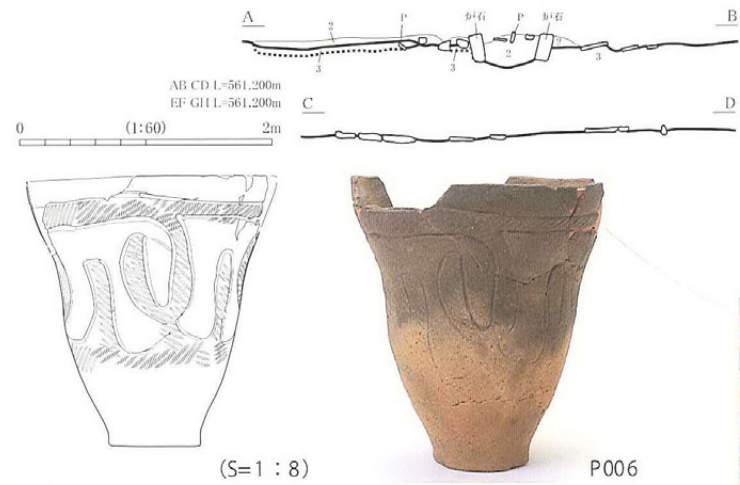


87 埋甕に入れられた石器
 どちらもつくりかけの矢じりである。
 (上: チャート製、下: 頁岩製)

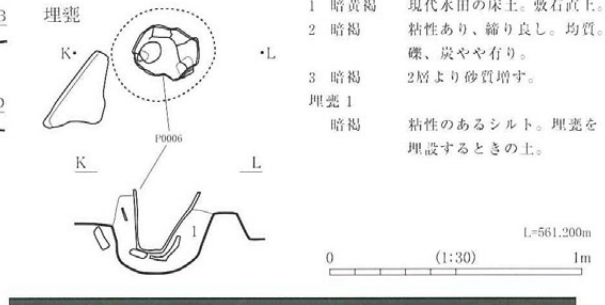


88 埋甕の出土状態
 土器は斜めに傾けて埋められていた。

- 1 暗黄褐 現代水田の床土。敷石直上。
- 2 暗褐 粘性あり、締り良し。均質。礫、炭やヤ有り。
- 3 暗褐 2層より砂質増す。
- 埋甕 1 暗褐 粘性のあるシルト。埋甕を埋設するときの上。



89 埋甕
 アルファベットの「J」のような模様が連続している。



(展開写真)

データ

住居番号：SB011 調査：記録保存

位置：調査区の東側。麻績川寄り。

かたち：柄鏡形。

大きさ：縦(5.92)×よこ(3.68)m

検出：炉石と敷石を検出。掘り込みは後世の耕作で、削られている。 炉：石組炉 柱 穴：不明

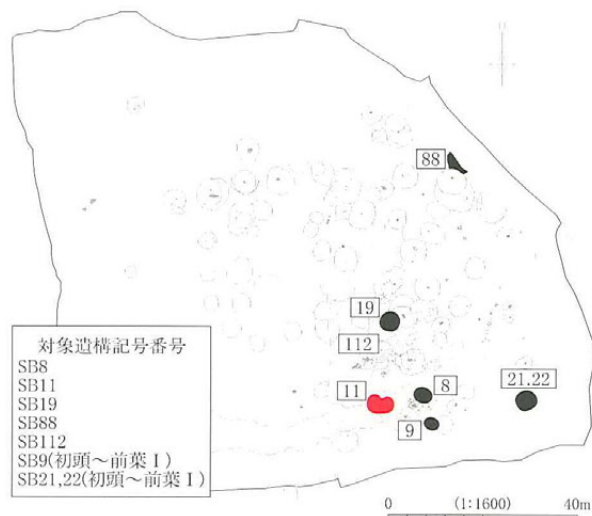
埋 葬：入口部と主体部の連結部にあり。斜位。内部から石鏃2点出土。 覆 土：薄く不明瞭。

土 器：18,478g 石 器：8,013g 骨 片：4.6g

住居が使われていた時期：縄文時代後期初頭

(根拠：埋葬の時期から)

この住居の位置（縄文時代後期初頭）



90 敷石の検出状況

入口が大きく張り出しているのが特徴である。



91 敷石の石材

平らな砂岩や火山岩などをていねいに並べている。



92 住居の様子

真ん中に砂岩でつくった炉がある。手前に埋葬がみえる。



P259

93 小形の土器

高さ11.0cm。小さいが丹精につくられている。

さまざまな穴 (土坑) どころ

竪穴住居とともに、縄文時代の人々が定住していた証拠に、ムラの中に掘られた多くの穴があります。また竪穴住居も広い意味では、大きな穴です。

大小さまざまな穴すべての用途を解明することは大変難しいことです。出土する土器も少ないため、それが掘られた時期もとらえにくいのが現状です。

調査ではそれぞれの穴の堆積状況を観察し、形を実測したり、写真に収めたりしています。

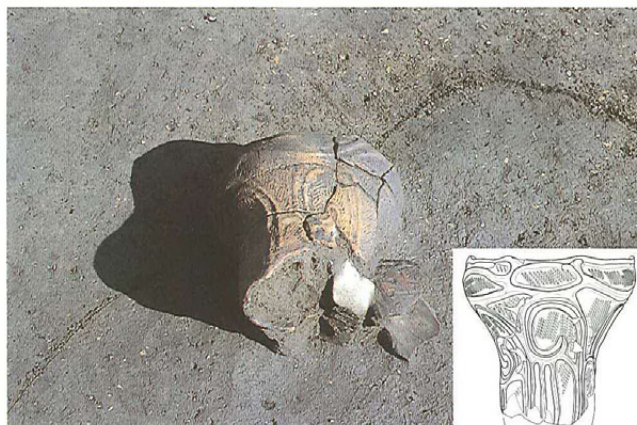
ここでは底のない土器が出土した、とても特徴的な穴を紹介します。貯蔵を目的にした可能性が高いSK021とは、違う目的があったのではないのでしょうか。



94 大きくて深い穴 (SK021)
深さ80cm。大きな石や土器片が出土した。
(縄文時代前期後葉)



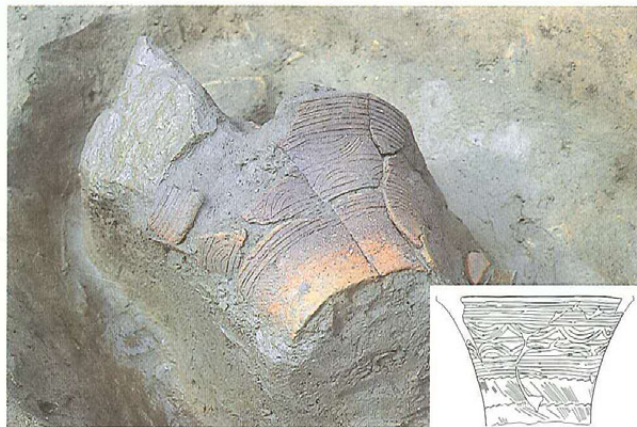
95 鉢が出土した穴 (SK178) P536
底がない鉢形土器がひっくり返しに出土した。
(縄文時代前期後葉)



96 深鉢が出土した穴 (SK177) P539
この穴は楕円形の穴になった。(縄文時代中期後葉)



97 穴の調査 (SK069)
穴の真ん中に土器が横たわっている。



98 SK069の土器 P577
この土器も底がない。(縄文時代前期後葉)

当時のお墓が見つかった

田んぼの土を取り除いていると、大きな土器が見つかりました。最初は埋蔵かと思いましたが、よくみるとひっくり返して埋められた鉢形土器でした。底部は田んぼの造成で壊されていました。

調査を進めると土器は、長さ1.32m程の楕円形をした穴に入られていることがわかりました。

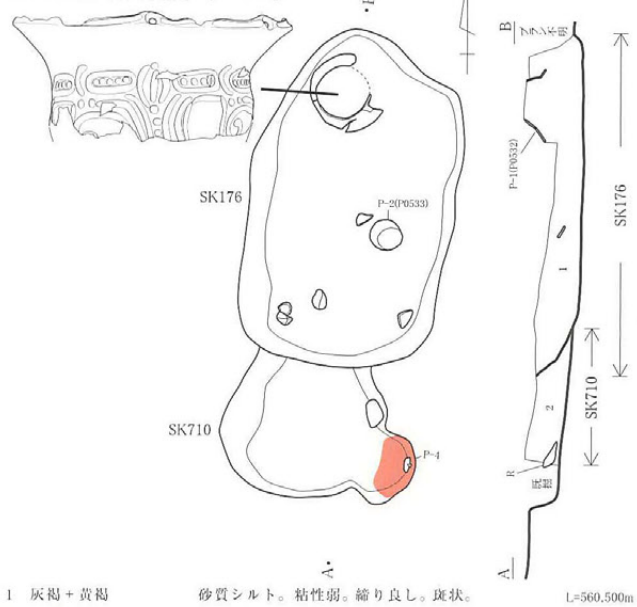
この鉢形土器が使われていた後期前葉には、亡くなった人をお墓に埋葬する際、顔に土器を被せる風習があったことがわかっています。東畑ムラの例もそのようなお葬式の一例なのでしょう。明科町北村遺跡では当時の墓地が見つかっています。お墓をつくる行為は、当時の人々の精神性の高さを示しています。



100 SK176の完掘状態

鉢形土器の底部は耕作で削られていた。当時は完形であっただろう。

SK176 土坑実測図 (1:30)



1 灰褐+黄褐

砂質シルト。粘性弱。縮り良し。炭状。

L=560,500m

102 SK176と出土土器実測図

0 (1:30) 1m



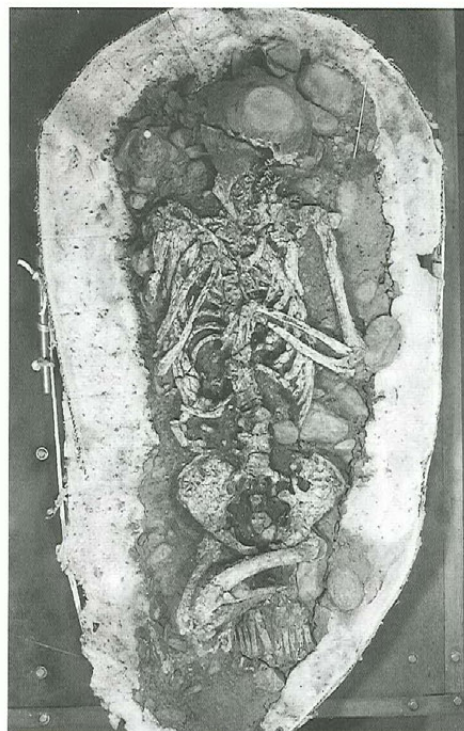
99 出土した土器

左は鉢形土器（逆さまのまま）。右は小形の深鉢形土器である。右高さ11.9cm。



101 葬送の様子

横たえた遺体の顔に土器を被せ、足元に小さな土器を^{たむ}手向ける。



103 明科町北村遺跡の埋葬人骨 (SH1215)

膝を折り曲げて手を組んでいる。顔には鉢をかぶられて葬られている。比較的若い男性と同定されている。(縄文時代後期)

「縄文土器」という道具

たくさんみつかった土器

縄文時代の最も代表的な遺物は土器です。東畑遺跡では1,310,507g（約1.3t）も出土しました。

その大半は煮炊きに使われていた深鉢形土器です。用途は「お鍋」と同じでも、その表面に施された模様は複雑であり、とても繊細です。

その模様や形は、時代ごと、地域ごとに変化していますので、縄文時代を探る時の物差しとして、重要な役割を果たしてくれます。



P134

104 焼成粘土塊

土器をつくったときの粘土か。焼かれている。左長さ7.4cm。



105 土器の出土状態

たくさんの土器と一緒に出土した。SB061出土。（縄文時代中期中葉）



106 土器の接合作業

扇形に土器を並べてみる。底以外はすべてみつかった。



P083

107 復元された土器

胴部に大胆な模様がついた深鉢形土器。高さ28.8cm。



108 縄文時代中期中葉の土器

鍋に使われた深鉢以外にも大小さまざまな土器がつくられている。右上高さ67.2cm。

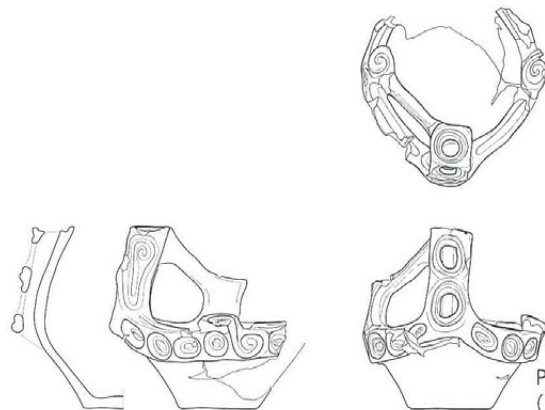
いろいろな形の土器



P378

109 釣手形土器

浅い鉢に釣手をつけている。内外面がすすけている。灯りをもした土器。高さ19.3cm。(縄文時代中期後葉)



P378 (S=1:8)

110 釣手形土器実測図



P561

111 浅鉢形土器

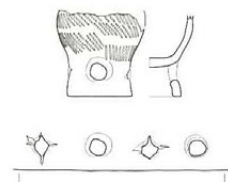
口の周りに粘土紐で模様を巡らせている。高さ12.5cm。(縄文時代中期中葉)



P316

112 台付土器

小ぶりの土器である。高さ9.0cm。



(S=1:8)

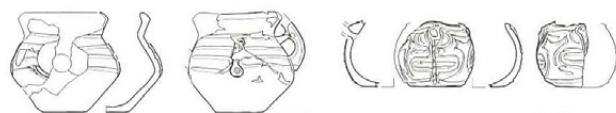
113 台付土器実測図

台には○と◇の透かし孔が1対ずつ開いている。



114 鉢形土器

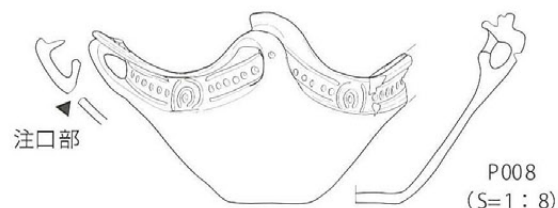
上からみると四角で底部は円形。四方の把手が大きく張り出している。胴部の一箇所に穴が開けられている。何かを注いだのだろうか。(縄文時代後期前葉)



P286

116 注口土器実測図

P571 (S=1:8)



P008 (S=1:8)

115 鉢形土器実測図

左側の把手の下に穴があげられている。高さ20.0cm。(縄文時代後期前葉)



117 注口土器

まるで急須のような形をしている。大きさもさまざま。中央上は高さ11.0cm。(縄文時代後期前葉)

縄文のお鍋、深鉢形土器



P005

118 前期後葉の土器

朝顔のように大きく開く器形。口縁には丸いボタン状の粘土が貼り付けてある。高さ33.1cm。



P041

119 中期初頭の土器

シンプルな形をしている。棒状の工具で何本も線を描いている。高さ24.0cm。



P048

120 中期中葉の土器
口縁の様子は蛇によく似ている。高さ14.6cm。



P076

121 中期中葉の土器

寸胴な縄文を施した土器。高さ34.8cm。



P070

122 中期中葉の土器

胴部全体にさまざまな模様を組み合わせている。高さ19.4cm。



P019

123 中期中葉の土器

激しい川の流れのような模様。千曲川の上流に多い土器である。高さ24.8cm。



P236

124 中期中葉の土器

口縁部が緩やかに膨らんでいる。乳房状突起とよばれる。高さ43.5cm。



P458

125 中期後葉の土器

大きな把手が4つ付くのが特徴である。高さ29.4cm。



P434

126 中期後葉の土器

胴が張ったスタイル。粘土紐に刻みを入れたり、器面にウロコのように連続した模様を描く。高さ43.6cm。



P457

127 中期後葉の土器

バケツのように寸胴なスタイル。口辺部の渦巻きが特徴。犀川流域の土器。高さ35.0cm。

ゆうこうつばつきどき
有孔罌付土器って何だろう

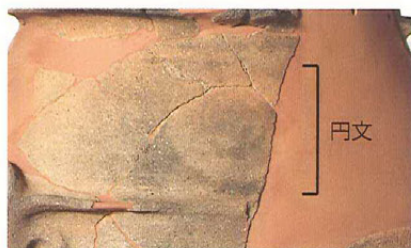
バラバラに割れて、139個に分かれていた土器片が、高さ67.2cmもある土器に復元されました。有孔罌付土器とよばれるこの土器は、平らな口縁の下に一周する罌状の帯に沿って、多数の小孔があげられていて、内外面は赤く塗られていました。また外面には円文が描かれ、胴部には人の顔のような不思議な模様があります。これまでに太鼓説、お酒つくりの壺説と、その用途には諸説あります。しかしまだ謎だらけの土器です。



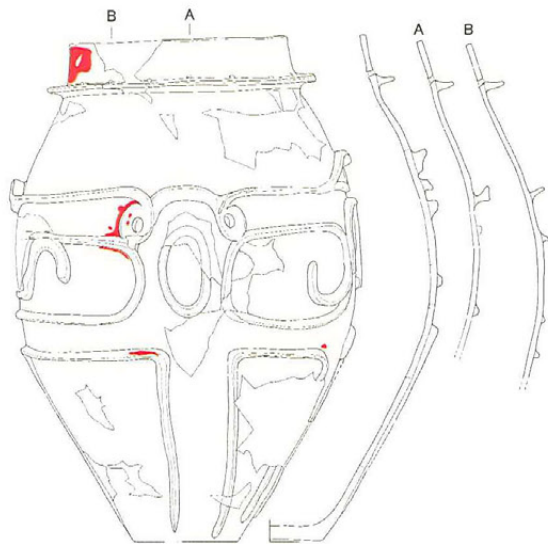
129 出土状況 (SB061住居跡)
たくさんの土器と一緒に割れて出土した。



128 全体写真
底部は比較的小さい。胴部中央に顔のような模様がある。高さ67.2cm。
P069



130 円文の状況
描かれた円文が浮かび上がってきた。



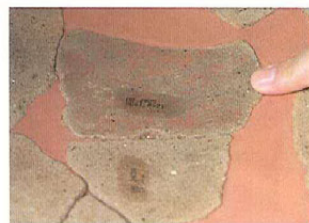
133 出土状況 (S=1:10)
赤い部分に赤色塗彩が残っていた。



134 展開写真
粘土紐を巧みに使って模様を連続させている。



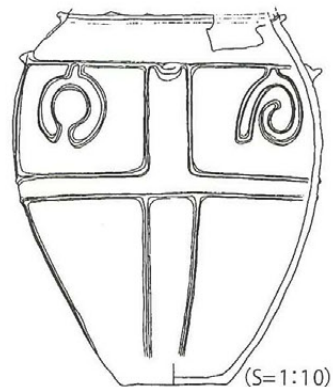
131 赤色塗彩 (外部)
赤の原料はベンガラだろうか。鮮やかである。



132 赤色塗彩 (内部)
この一片だけが赤かった。洗い落ちているが内部にも色を塗っていたのだろう。

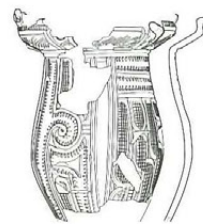


135 付着物のある土器
同じ住居から出土。内面底にウルシのような黒色の付着物がある。高さ12.7cm。
P075



136 長野市檀田遺跡の土器
とてもよく似ている。穴に埋められて出土した。

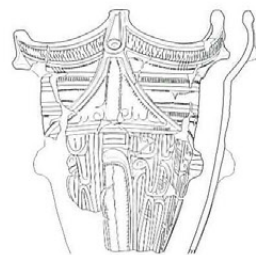
連続する模様



P012

137 中期中葉の土器 (SB045出土)

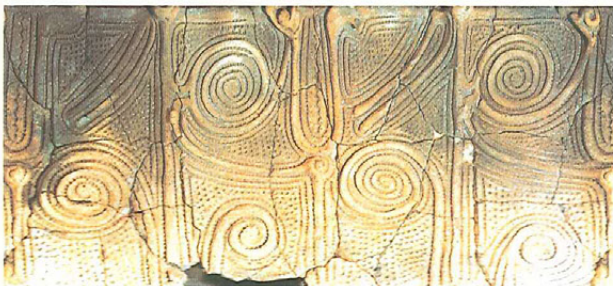
胴部に渦巻きと四角いパネルのような模様が連続する。北陸地方の影響を受けた土器。高さ22.5cm。



P009

138 中期中葉の土器 (SB045出土)

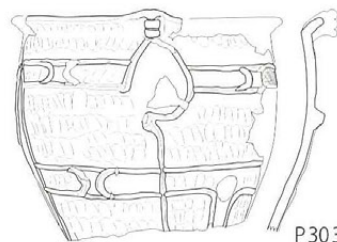
口縁部に北陸地方、胴部に千曲川流域の土器の特徴がみられる。東畑遺跡の地域圏を考えさせられる土器。高さ32.6cm。



P012

139 中期中葉の土器 (SB045出土)

4分割された胴部に2種類の渦巻き文が交互に連続する。高さ29.6cm。



P303

140 中期中葉の土器 (SB012出土)

胴部に指おさえの痕をあえて残す。粘土紐が縦横に連結する。千曲川流域の土器と考えられる。高さ26.8cm。

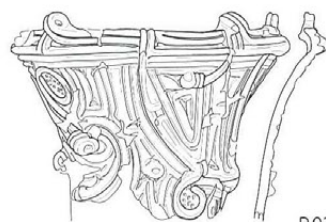
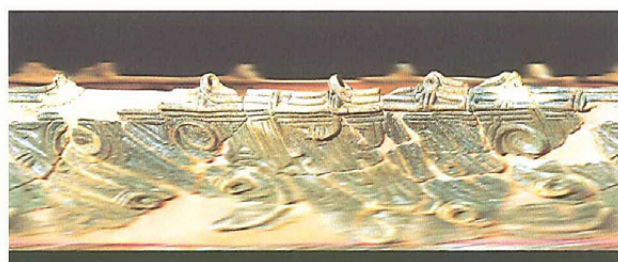


P020

141 中期中葉の土器 (SB005・095出土)

人の後ろ姿を土器に付けている。環状の突起が頭部にあたる。あたかも土器を抱えているかのようだ。高さ29.2cm。

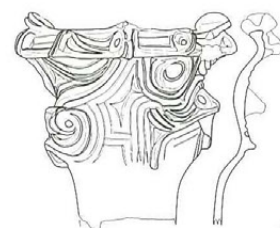
土器を横に開いてみる



P021

142 中期中葉の土器 (SB095出土)

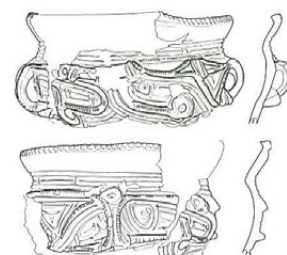
凹凸の線を巧みに組み合わせて曲線を描く。よくみると同じ模様が2回繰り返される。計算された構成。焼町土器*とよばれる。高さ19.9cm。



P002

143 中期中葉の土器 (SB095出土)

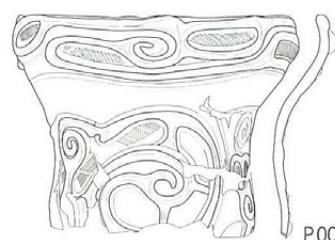
SB95の穴に埋められていた土器。「S」字状の曲隆線を中心として、大きく模様を展開する。焼町土器。高さ32.6cm。



P433

144 中期中葉の土器 (SB065出土)

まるで人のような、「X」字形の把手が付く。これも焼町土器の仲間である。高さ11.7cm。



P003

145 中期後葉の土器 (SB004埋篋)

口縁部が関東地方、胴部の大きな渦巻きが東北地方の土器に似ている。口縁部は4回、胴部は3回模様を繰り返す。高さ26.4cm。



P006

146 中期後葉の土器 (SB011埋篋)

胴部に「J」字文が4回繰り返されている。縄文を磨り消してコントラストを付けている。高さ28.4cm。

さまざまな模様



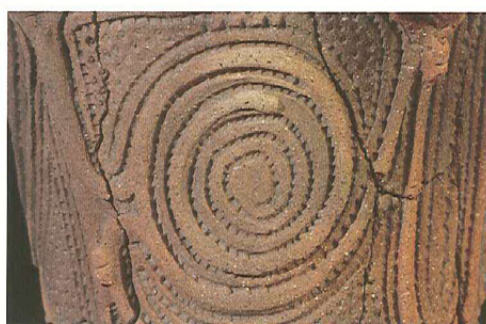
147 深鉢の胴部 (P0005)
細い棒で矢羽根のような模様を丹念に描き込んでいる。
(縄文時代前期)



148 深鉢の口縁部 (P1631)
棒で描いた模様の上に丸や細長い粘土を貼り付ける。
(縄文時代前期)



149 深鉢の口縁部 (P0338)
ソーメン程の細い粘土紐の上を、半分にした竹管の内部でチクチクと模様をつける。
(縄文時代前期)



150 深鉢の胴部 (P0001)
粘土を貼り付けた渦巻文、空間には竹管^{ちくかん}で丸い模様をつける。
(縄文時代中期中葉)



151 深鉢の胴部 (P0013)
2本の粘土紐を撚って貼り付けている。
(縄文時代中期中葉)



152 深鉢の胴部 (P0303)
指で器面を整形した痕を残す。
(縄文時代中期中葉)



153 鉢の胴部 (P0020)
半分に割った竹管の内側の曲線を利用している。
(縄文時代中期中葉)



154 深鉢の胴部 (P0433)
竹管状工具を使った複雑な文様。
(縄文時代中期中葉)

細やかな表現と施文技術



155 釣手土器の口縁部 (P0378)
土器の縁に粘土を厚く盛り付けている。
(縄文時代中期後葉)



156 深鉢の胴部 (P0004)
粘土紐の渦巻き文と棒で描いた線の連続。
(縄文時代中期後葉)



157 深鉢の胴部 (P0434)
縦に貼り付けた粘土紐の上に刻みを入れる。
(縄文時代中期後葉)



158 深鉢の胴部 (P0006)
棒で描いた模様の中に縄文を転がす。
(縄文時代後期初頭)



159 鉢の胴部 (P0572)
縄文を磨り消して模様に対比を付ける。
(縄文時代後期前葉)



160 深鉢の底部 (P0108)
土器をつくる時に敷いた木の葉の痕がついている。
(縄文時代中期中葉)



161 深鉢の胴部 (P0285)
器面を木のへらで削って整形している。
(縄文時代後期前葉)



162 鉢の底部 (P0578)
土器をつくる時に敷いた編み物「網代 (あじろ)」の痕が残る。
(縄文時代後期前葉)

東畑ムラの土器たち

時がたち、うつりかわる



163 縄文時代中期中葉の土器

土器のひとつひとつに強い個性がある。生産地の特徴が、かたちや模様にはっきりと残されている。東畑ムラには各地から土器が運ばれてきた。



164 縄文時代中期後葉から後期前葉の土器

かたちのよく似た土器が多くなる。煮炊きにつかう底の深い土器は大きさも共通性がある。犀川流域の土器と千曲川流域の土器が混ざり合う。

土器付着物や炭化材から年代を測る

SB95号住居跡から出土した土器の“おこげ”のような付着物と、床面上に残っていた炭化材の年代を測りました。その方法は、炭素14 (^{14}C) という、時間経過とともに減っていく性質をもつ物質の量をはかることで、何年前のものかを定める方法で、「炭素14年代測定法」とよばれます。まず、国立歴史民俗博物館の年代測定資料実験室で、汚染を除去するために化学的に洗浄し、測定するために形を調製しました。加速器質量分析計による ^{14}C 測定は、東京大学原子力研究総合センターのタンデム加速器施設 (MALT、機関番号MTC) で行いました。

年代データの ^{14}C BPという表示は、西暦1950年を基点にして計算した ^{14}C 年代 (モデル年代) で、加速器で測定した $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比により、 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比に対する同位体効果を調べ補正した $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、 ^{14}C 年代値が得られます。ただし、これは放射性炭素の比率から計算される炭素濃度で、実際には年代ではありません。本当の年代を推定するために、実際の年代がわかっている木の年輪を調べた結果に対比させます。この年輪年代と炭素年代の対比のデータベースは、較正曲線INTCAL98として公開されています。これを「炭素年代を較正する」と表現しており、結果は較正年代とよび、較正された西暦 cal BCという書き方をします。

今回の測定は、同一住居出土の床面上出土炭化材と、覆土中の復元可能土器に付着していた“おこげ”の測定で、おおよそ誤差範囲内で一致した結果を得ることができました。両者の較正年代の確率が、高い確率密度で重なる紀元前3100—2915年の時間幅の中に含まれる可能性が最も高いといえ、縄文中期中葉から後葉の、勝坂3式*から加曾利E*・曾利*成立期の年代としてとらえられます。焼町土器の年代を測定した例として、貴重な測定例となりました。 (詳細はDISC-1参照)

【国立歴史民俗博物館平成16年度基盤研究「高精度年代測定法の活用による歴史資料の総合的研究」 (代表 今村峯雄) の成果による】

小林謙一¹⁾・坂本 稔¹⁾・尾寄大真¹⁾・新免歳靖¹⁾・松崎浩之²⁾

- 1) 国立歴史民俗博物館
- 2) 東京大学原子力研究総合センター・タンデム加速器研究部門



165 測定前の試料処理

汚れを落とし試料を整える。(国立歴史民俗博物館年代測定試料実験室)

試料番号	測定機関番号(加速器)	$\delta^{13}\text{C}\text{‰}$	^{14}C BP 補正值	暦年較正cal BC(2 σ)	(%)は確率密度
P0002 SB95 ピット6内出土土器	NNMS 3 MTC-05221	-30.44	385 ±40	3255-3240	1.6%
				3100-2900	93.4%
SB95 床上出土炭化材	NNMS C4 MTC-05222	-29.9	4425 ±45	3330-3215	22.8%
				3185-3155	4.6%
				3120-2915	7.8%
試料のなまえと出土したところ	機関のNo.	^{13}C の比率	^{14}C の比を年代で表記	実年代の推定(西暦表記)とその確立	



166 測定した土器

測定の結果、今から5,100年~4,900年程前に使われた土器であることがわかった。



167 付着炭化物 (土器の内側)

土器で煮た食べ物の“おこげ”から年代がわかる。



168 付着炭化物の拡大写真

耳かき1杯くらいの量の炭化物から測定する。

分析レポート2

土器の粘土から産地を探る

東畑遺跡出土縄文土器の胎土分析

東畑遺跡より出土した縄文土器について胎土*分析を行いました。今回は、主に胎土中の粘土の分類を行うことで、粘土採取地を検討（原産地推定）するための基礎データを得ることを第一の目的としました。

1. 分析資料（試料）

分析に用いた資料をP番号（本報告における土器の個体番号）を用いて表1に示しました。分析資料は計55点。このうち52点は縄文土器、1点（P134）は焼成粘土塊、2点は遺跡内や遺跡周辺から採取した粘土（粘土1.2）です。分析資料は縄文時代各期の遺構より出土したもので、縄文時代中期に属すると考えられるものが多いです。分析資料の時期や型式学的な所見については、表1及び本報告書のDISC-1を参照してください。分析資料の帰属時期、型式学的所見は柳澤亮氏・寺内隆夫氏（県埋文センター）によります。遺跡内粘土の採取は坂北村教育委員会が行いました。

2. 分析方法

2-1. 蛍光X線分析の方法

胎土中の粘土の分類を行うため胎土の蛍光X線分析*による胎土分析を実施しました。蛍光X線分析の方法はこれまでの筆者の方法（建石1996、2003他）に準拠しました。

本研究で用いた分析装置は、セイコー電子工業製卓上型蛍光X線分析装置SEA-2001です。分析条件は以下の通りです。X線発生部のターゲット Rh管球、加速電圧 15kV、加速電流 100~150 μ A、照射径 1~3mm、検出器 Si(Li)半導体検出器、室内雰囲気 真空、測定時間 300秒、測定回数5回。定量分析は装置装備のファンダメンタルパラメーター法によった（標準試料なし）。

分析対象とした元素はSi、Ti、Al、Fe、Mg、Ca、K、Mnの8元素です。土器胎土の主成分元素組成は、岩石学の慣例にしたがい酸化物として表記しました。本研究では標準試料を用いなかったため、定量性には優れませんが、各試料間の比較や傾向を知るといレベルでは影響ないものと判断しました。また、Naについては本条件での定量が困難なため測定しませんでした。

土器の原料を粘土と河川砂等の混和材*とを混ぜ合わせたものと仮定すれば、土器胎土中における粘土と混和材の明瞭な識別・分離は困難です。本研究では肉眼で確認できる大粒の鉱物・岩片粒子を混和材に由来する可能性が高いものとして、X線照射範囲から極力外すことで対応しました。この際、資料にマスキングをすることで、X線照射範囲を通常（3mm）から1mm程度まで調節して測定を行いました。

2-2. 胎土の不均一性の問題への対応

同一個体内における胎土の不均一性を考慮し、まず個体ごとに測定位置を変えて5回ずつ蛍光X線分析を実施した後、個体ごとの分析結果のまとまりをみるため、すべての測定結果をクラスター分析*に供しました。クラスター分析の結果、5回の測定結果が同一クラスター内に収まった個体については、5回の平均値を算出しこれをその個体の粘土の化学組成としました。

5回の測定結果がばらつく個体については、さらに6回目、7回目の測定を実施し、5つ以上の測定結果が同一クラスターを形成した段階で5回の平均値を算出してこれをその個体の化学組成としました。今回の分析では7回以上の測定が必要だった個体はありませんでした。クラスター分析にはSPSS社製多変量解析ソフトSPSS(11.5J)を使用しました。

3. 分析結果と考察

表1に蛍光X線分析による胎土分析の結果を示しました。

土器胎土に含まれる、風化鉱物である粘土の採取地域等を検討する場合、風化による影響の少ない理想的な岩石との単純な比較は好ましくありません。特に化学組成の検討では、風化の過程で溶脱*する成分の存在を考慮しておくことが重要です。図1は、比較的溶脱による影響が少なく母岩の状況をある程度反映すると考えられるSiを横軸に、Feを縦軸にとったものです。この図では、各プロットが概ね負の相関を示すことが理解できました。ここには示していませんが、新鮮な火成岩の分析結果もほぼ同一のライン上にプロットされます。図1において、分析結果が左上側にプロットされる個体ほど塩基性よりの粘土に由来する胎土をもち、分析結果が右下側にプロットされる個体ほど酸性よりの粘土に由来する胎土をもつと考えられます。

図1によれば、型式学的所見により斜行沈線文系、勝坂式、焼町、唐草文系等にまとめられた土器群は、それぞれ胎土の特徴に一定のまとまりが認められることがわかります。また、遺跡内採取粘土(粘土1.2)はいずれも、今回分析した縄文土器、焼成粘土塊の粘土の特性とは異なる特性をもつこともわかりました。

今後、混和材と関わる可能性の高い大粒子に焦点を当てた分析やより詳細な型式学的検討を実施した上で、より具体的、総合的な考察を行なう機会を持ちたいと思います。

建石 徹 (東京芸術大学大学院美術研究科)

謝辞

本研究を実施するにあたり、柳澤亮氏、寺内隆夫氏をはじめ長野県埋蔵文化財調査センターの皆様には、多大なご教示・ご協力をいただきました。寺崎裕助氏、長田友也氏、津村宏臣氏には資料採取時等にご一緒いただき、多くのご教示をいただきました。二宮修治氏には胎土分析の方法全般について多くのご指導をいただきました。

また、本遺跡の地権者である小林久廣氏には、発掘調査終了後にも関わらず遺跡周辺で産出する粘土の採取を許可していただき、さらに、周辺での過去の粘土の利用法やその採取地点等について多くのご教示をたまわりました。

皆様方にご場をお借りして感謝申し上げます。

表1 東畑遺跡出土縄文土器の胎土分析結果 (wt%)

相対P. No.	時期	型式等	SiO2	Al2O3	CaO	TiO2	Fe2O3				
105°	9	中期中葉I	斜行沈線文系(後神)	3.5	21.1	52.7	2.0	1.6	0.7	0.2	8.2
105°	10	中期中葉I	斜行沈線文系(後神)	1.8	24.9	61.9	1.3	1.5	0.9	0.0	8.7
105°	11	中期中葉I	斜行沈線文系(後神)	2.4	31.5	50.4	2.8	1.1	1.1	0.2	10.5
105°	12	中期中葉I	網罟	1.7	23.7	62.9	1.9	1.1	1.4	0.1	7.2
106°	13	中期中葉I	斜行沈線文系(後神)	2.3	27.5	59.2	1.9	1.8	0.9	0.0	6.2
107°	19	中期中葉IV-V	焼町	1.3	23.6	62.8	1.1	1.2	1.3	0.0	8.6
107°	21	中期中葉IV-V	焼町	1.9	24.3	59.3	1.1	2.1	1.3	0.0	9.9
107°	23	中期中葉V	勝坂	0.7	25.0	52.7	1.4	1.7	2.1	0.0	16.4
CD	46	中期中葉IV-V	焼町	1.3	25.5	57.4	1.1	1.8	1.8	0.2	10.9
75°	47	中期中葉IV	勝坂	1.5	25.7	56.3	1.6	1.3	1.7	0.2	11.7
38°	48	中期中葉IV	勝坂	1.5	26.8	59.2	1.4	1.3	2.0	0.0	7.8
CD	49	中期中葉IV-V	勝坂	2.1	27.4	57.7	0.8	1.0	1.4	0.1	9.5
CD	51	中期中葉IV	勝坂	1.4	25.3	59.2	1.2	2.6	1.5	0.1	8.8
CD	57	中期中葉IV-V	焼町	2.3	27.9	56.7	2.0	1.6	1.9	0.0	7.7
CD	59	中期中葉IV	勝坂	1.5	24.3	57.2	1.7	1.4	1.6	0.1	12.2
CD	61	中期中葉IV-V	焼町	1.4	24.0	61.1	0.9	1.3	1.5	0.0	9.7
CD	64	中期中葉IV-V	勝坂	2.1	23.6	59.8	1.7	2.1	1.0	0.0	10.1
106°	66	中期中葉IV	有孔貯付(勝坂+焼町古段階)	2.5	26.9	51.9	1.1	2.8	1.8	0.0	12.9
38°	76	中期中葉II	勝坂	1.3	28.8	56.0	1.1	2.7	1.4	0.0	8.6
CD	77	中期中葉II	勝坂	1.3	24.1	59.5	1.8	1.6	1.4	0.1	10.2
CD	78	中期中葉II	五領ヶ台	2.0	26.6	52.9	2.4	1.7	1.5	0.2	12.7
CD	80	中期中葉II	勝坂	1.6	26.8	56.5	1.5	2.2	1.4	0.0	10.0
36°	83	中期中葉II	加曾利階	1.2	24.9	57.7	1.4	1.8	1.1	0.1	11.7
CD	84	中期中葉II	堀之内	1.9	23.1	58.2	1.4	1.9	1.3	0.1	9.2
CD	87	中期中葉II	勝坂	2.2	25.8	51.3	1.8	1.6	1.5	0.1	15.8
108°	164	中期後葉I	加曾利階	1.5	24.3	66.8	1.5	1.3	1.0	0.1	9.5
107°	236	中期中葉III	勝坂	1.9	22.6	63.9	1.5	1.4	1.2	0.2	7.3
CD	257	中期初葉II	五領ヶ台	1.4	28.5	56.9	0.3	4.8	1.6	0.1	12.4
110°	284	後期前葉I	網罟	2.1	24.6	55.1	2.4	1.6	1.2	0.0	13.0
110°	285	後期前葉I	加曾利階	2.3	25.1	58.6	1.6	1.7	1.2	0.1	9.4
110°	286	後期前葉I	堀之内(注口)	0.0	12.0	58.8	0.4	2.0	1.5	0.0	10.9
106°	303	中期中葉IV	斜行沈線文系(後神)	1.1	27.7	48.5	0.7	2.5	2.5	1.2	15.8
CD	307	中期中葉IV	勝坂	1.8	26.6	54.2	1.5	2.3	1.6	0.2	11.8
CD	331	中期初葉II	五領ヶ台	1.6	25.1	58.5	1.4	1.7	1.2	0.6	9.8
CD	371	中期中葉IV	焼町	1.2	25.3	57.1	1.0	2.7	1.6	0.0	11.0
108°	379	中期後葉III	唐草文系	1.8	26.2	56.6	1.3	1.7	1.7	0.0	10.7
108°	434	中期後葉III	唐草文系(加曾利階)	1.5	22.6	63.0	1.8	1.1	1.1	0.0	8.9
109°	458	中期後葉IV	加曾利階(大木系)	2.1	25.7	58.2	0.8	1.0	1.4	0.1	10.8
38°	458	中期後葉IV	唐草文系(加曾利階)	0.9	22.9	60.3	2.0	1.2	1.5	0.0	11.2
109°	459	中期後葉IV	唐草文系	1.5	22.2	63.3	1.6	1.2	1.3	0.0	8.8
110°	532	後期前葉I	堀之内	0.8	23.0	61.5	1.2	1.4	1.4	0.3	10.4
CD	534	後期前葉I	不明	2.0	19.0	53.0	2.1	2.9	1.9	0.1	20.9
35°	534	中期後葉IV	加曾利階(大木系)	1.0	24.7	60.7	1.5	1.7	1.4	0.0	9.0
105°	536	前期後葉II	羽状網罟	2.0	26.1	59.5	0.8	1.0	1.1	0.0	9.4
CD	542	中期中葉I	斜行沈線文系(後神)	2.2	25.7	61.4	1.1	1.1	1.0	0.1	7.4
105°	544	前期後葉II	網罟	1.6	20.8	63.6	0.7	1.4	1.5	0.1	10.3
CD	561	中期中葉III	勝坂	2.4	23.6	60.6	1.2	1.4	1.7	0.1	8.9
106°	565	中期中葉I	焼町古段階	1.9	23.8	62.3	1.9	1.4	1.0	0.0	7.6
CD	567	中期中葉I	斜行沈線文系(後神)	3.1	32.0	51.2	0.8	0.7	1.3	0.1	10.8
110°	572	後期前葉I	堀之内	1.6	19.6	71.7	1.2	0.9	1.0	0.0	3.9
105°	577	前期後葉II	網罟	0.6	22.1	55.6	1.5	1.7	2.1	0.1	16.4
109°	579	中期後葉IV	加曾利階(大木系)	1.2	24.7	59.3	0.8	1.9	1.3	0.0	13.8
36°	134	中期中葉IV	焼成粘土塊	3.5	29.5	52.0	0.4	2.1	1.0	0.9	9.8
	粘土1		遺跡内採取粘土	0.0	11.5	45.8	3.9	1.3	1.7	0.1	15.7
	粘土2		遺跡内採取粘土	0.0	11.1	72.0	3.3	0.9	1.6	0.1	11.0

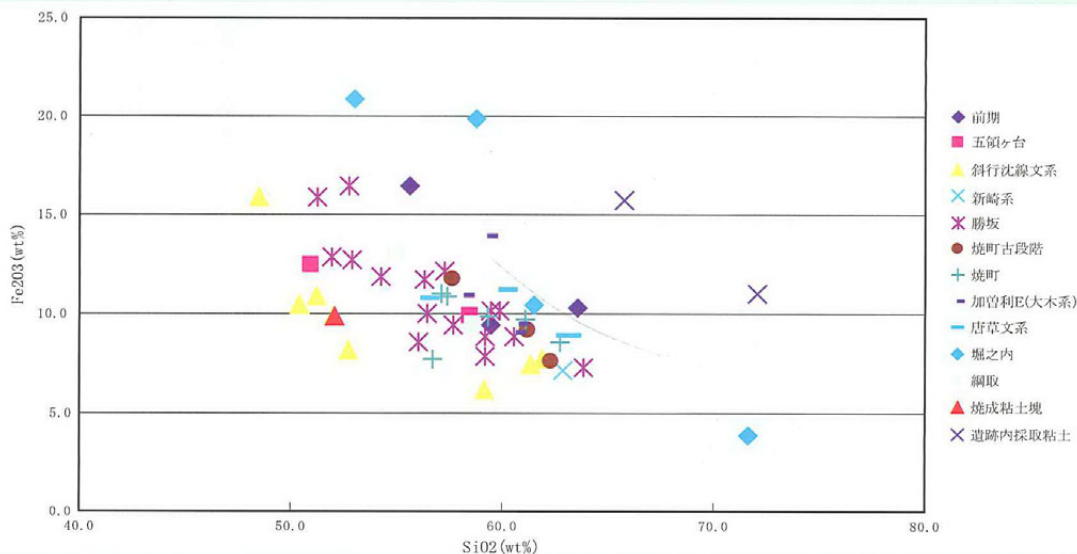
粘土1は調査区西側の崩壊整備事業地内の現地面下20cmから採取。灰黄色で細粒砂含む。基本層序のV-4層に相当。
粘土2は遺跡北西200m、泉道下の傾斜地から採取。表土下に黒色の粘土層が堆積する。地権者の小林さん(中学生時代、美術科の授業のため採取した)とのこと。良質の粘土である。

文献

建石 徹 1996 「縄文時代中期における土器の移動に関する基礎的研究」『土曜考古』20
2003 「下の根地区出土縄文土器の胎土分析」『南鍛冶山遺跡発掘調査報告書10』

藤沢市教育委員会

図1 東畑遺跡出土縄文土器の胎土分析結果 (Si-Fe)



石でつくった道具

さまざまな石器

縄文時代の人々は、自然環境と共生して、身近にある材料をととても上手に利用しています。石器も自然素材である石を加工してつくりだした道具です。その種類は多く、東畑遺跡でも30種の石材を用いた29種類、3,628点の石器が出土しています。使う対象物にあわせて石材を選び、加工方法を工夫し製作された石器には、その石材の光沢ばかりではなく、先人の残した、技術水準の高い確かな製品としての魅力に溢れています。



169 石鏃 (矢じり)

弓矢の先に付ける狩猟具。遺跡全体で571点出土した。石材は黒曜石やチャートが多い。右下(3549)は長さ2.9cm。



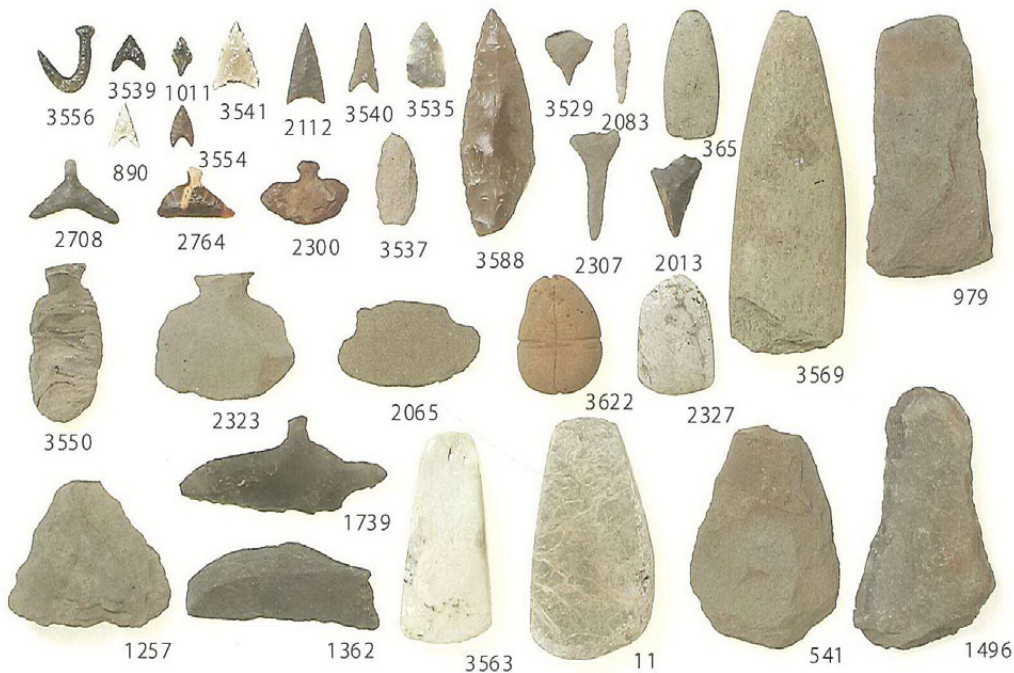
170 石錐 (ドリル)

動物の皮や骨、木などに穴を開ける道具。つまみがあるタイプと棒状のタイプがある。右下(3592)は長さ5.4cm。



171 三脚石器 (左上) と石匙 (ナイフ)

三脚石器の用途は不明。石匙は、つまみの付く小ぶりのナイフ。皮剥ぎに使われたとも考えられる。右下(3550)は長さ7.3cm。



172 色とりどりの石器

いろいろな石材の利点を生かして、様々な道具をつくり出している。右下(1496)は長さ5.4cm。

小さな石器、大きな石器

173 ^{つりはりかたせつき} 釣針形石器と ^{せきすい} 石錘 (石のおもり)

釣針形石器は非常にていねいにつくられている。黒曜石製。長さ3.1cm。非実用品か。砂岩で作られた石錘は、十字に入れた溝に糸を巻きつけて、釣り漁や網漁に使う。長さ5.4cm。



175 黒曜石の原石と石核

石器の素材。遠く八ヶ岳一帯に産地がある。東畑遺跡でも石器づくりが行なわれていた。拾え切れないほど細かなチップも出土している。右上 (88) は縦5.2cm。



177 ^{ていかくしき} 定角式の磨製石斧

断面が長方形の磨製石斧。木を加工する道具。石器として糸魚川付近から持ち込まれた。左下 (26) は高さ10.1cm。



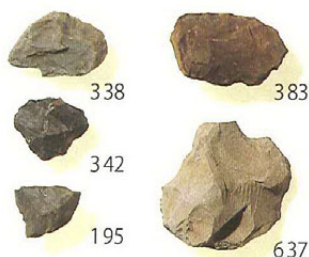
179 ^{だせいせき} 打製石斧

土を掘る道具。竪穴住居を掘ったり、ヤマイモを掘ったことだろう。頁岩や麻績川にある砂岩を石材にするものが多い。右下 (1816) は長さ13.7cm。



174 水晶の石器

四阿屋山に産地がある。硬い石のため、きりや叩く道具に使われた。右上 (2544) は長さ4.2cm。



176 ^{せつかく} その他の石核

チャートや頁岩といった堆積岩も大切な石材である。右下 (637) は縦7.2cm。



178 ^{にゅうぼうじょう} 乳棒状の磨製石斧

木を切り倒す道具。定角式より厚みがあり長く重い。右上 (2173) は長さ14.2cm。



180 ^{すりいし たたきいし*} 石皿と磨石・敲石

当時の主食である、ドングリやクルミを加工する道具。生活の必需品。石皿の長さ46.5cm。

分析レポート3

石器からみたムラの生活

東畑遺跡からは計3349点の石器が住居跡内から出土しました。これらの石器は当時の人々の生活道具であり、食料調達に使った石器、調理に使った石器、大工道具として使った石器、または石棒のようなお祭りの道具や、垂飾り・耳飾りなどのアクセサリ類まで様々な種類があります。これらのうち、食料調達に使った石器や、食料の調理・加工に使ったと考えられている石器から、東畑遺跡でどのような生業が行われていたのか、または、時代ごとに変化があるのか分析してみましよう。

方法としては、まず生業対象物がある程度判明している石器について、それぞれの対象物ごとに分類します。今回は大きく3種類に分類しました。

☆狩猟活動に用いられた石器群 = 石鏃、石槍、ていねいにつくられた小形の石匙

- ◎対象物…シカ・イノシシなどの動物。
- 石鏃・石槍 = 石鏃は弓矢の先、石槍は槍の先に着け、狩りに使った道具。
- 小形石匙 = 獲物の解体に使ったと考えられている道具。

☆植物質食糧の採集に用いられた石器群 = 打製石斧、横刃形石器、粗くつくられた大形の石匙

- ◎対象物…ヤマノイモ・ユリ根・クズ・ワラビ根などの根菜類と山菜類。
- 打製石斧 = 土掘り具と考えられており、根菜類の採集に使った道具。

○横刃形石器・大形石匙 = 植物の切削に使われたと考えられ、山菜類などの採集に使った道具。

☆植物質食糧の加工に用いられた石器群 = 石皿・磨石・凹石・敲石

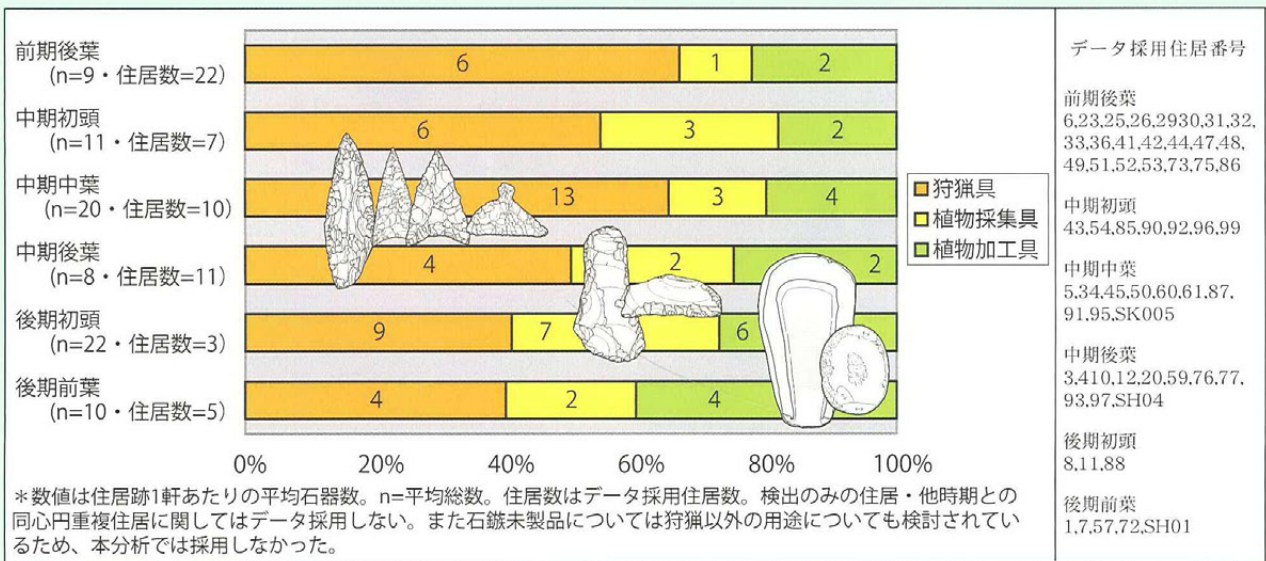
- ◎対象物…ドングリなどの木の実。
- 凹石・敲石 = 木の実の殻を割る道具。
- 磨石・石皿 = 実を磨り潰して粉にする道具。

次に住居跡から出土したこれらの石器数を時期ごと（縄文時代前期後葉・中期初頭・中期中葉・中期後葉・後期初頭・後期前葉）に集計し、各石器群の割合（%）を計算します。

下のグラフがその結果です。3種類の生業のうち、東畑遺跡では狩猟活動が盛んであったようですが、中期後葉以降は植物質食料の利用が増えているようです。後期前葉ではドングリなどの木の実の利用が盛んになったようです。また同じ東筑摩郡の山形村殿村遺跡・淀の内遺跡、朝日村熊久保遺跡などでは中期中葉に植物質食料の採集活動がとても盛んになるのですが、東畑では狩猟が中心であり、他遺跡と異なった様子を示しています。

石器からみた分析では、東畑遺跡では全体的に動物質食料と植物質食料をバランス良く取り入れた生業が行われていたようです。また網漁に使う石錘が1点出土しています。近くの麻績川で、季節になると遡上してくるサケ・マスを対象とした漁撈も行われていたことでしょう。

伊比博和



181 石器器種組成からみた時期別の生業

人々が食べていたものは何か

遺跡からみつかった動物の骨

住居跡を掘っていると、白くてもろい石のようなものがたくさん出てきました。よくみると"骨"であることがわかりました。

その総重量は2364.8gもありました。とても細かく割れています。地点別の出土量をみると、覆土が厚く、土器や石器もたくさんみつかる住居跡から多くみつかっています。これとって特別な出土状況はありませんでした。

みつかった骨は洗浄して乾燥して保管してあります。ではこの骨はどのような動物なのでしょう。

京都大学霊長類研究所の茂原先生に「どの動物の、どの場所の骨なのか」を調べていただきました。そうすると、1点以外すべて焼けている骨であることがわかりました。

また98点について動物の種名と部位がわかりました(185 グラフ)。そうするとイノシシとシカがその大半を占めていました。またウサギやカエルと考えられる小さな動物の骨もみつかりました。

石器による解体痕(カットマーク)が残っている例も2点みつかりました(183)。



3412-1

182 焼けていない骨

SB75出土。割れてまともになって出土した。種不明。長さ12.4cm。



3244-2

183 解体痕のある骨片

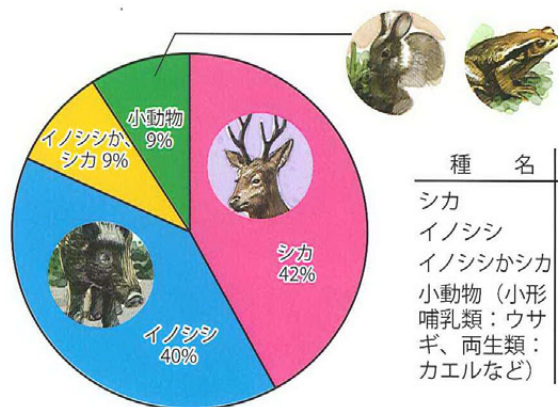
石器で解体した痕がみられる。種不明。長さ2.6cm。



3272

184 SB045号住居跡出土の骨片

覆土などから計370gの骨片が出土。よく焼けている。



185 同定された骨の種別比

魚骨などはみつかっていない。

内陸の遺跡では焼けた骨が多く出土する例があります。それにはお祭りや祈りといった特別な意味があるといわれています。

東畑の出土例は何を示しているのでしょうか。いまのところ特別な意味があるのか、単なる「たべかす」なのか分かっていませんが、内陸遺跡の貴重な出土例といえるでしょう。

→詳細な同定結果はDISC 1へ



3483-1

186 シカの骨

SB097出土。すべて焼けている。右長さ4.2cm。



3270-5

3511-1

3444-1

3273-2

3677-1

3272-1

3526-1

187 小動物の骨

3272-1がウサギ(?), 3273-2がカエル(?)と同定された。右上長さ1.2cm。